興奮再現。

持ち運んで楽しむか

BIG SOUNDS
実用最大出力4.2W
TRK-8030 ￥43,800

クリアでナチュラルな音質の実用最大出力4.2W(2.1W＋2.1W、EIAJ/DC)のパワー。12cmウーハー(中低音域用)と3.5cmツイーター(高音域用)採用のスピーカー・システムが再現するリアルなパワーサウンド、心ゆくまでお楽しみください。

- ●FM／AM2バンドラジオつき
- ●(クロム／ノーマル)テープセレクター採用
- ●フルオートストップ
- ●外部スピーカー端子つき(別売り APS-80)使用
- ●ラインイン、ラインアウト端子、マイク端子(R用、L用各1個)つき



ステレオ パディスコ8030 TRK-8030 ¥43,800

●電源DC：9V(単1×6) AC：100V 50/60Hz カーアダプター(別売りD-70) ●大きさ 幅41.2×高さ25.6×奥行12(cm) ●重さ 5.0kg(乾電池含む)

システム パディスコ



組んで楽しむか

パディスコ8030はシステムアップできるラジオカセット。専用外部スピーカー(APS-80)の接続により、迫力あるステレオ・サウンドがさらに倍増。また、プレヤー(HT-320)を接続すればレコード音楽も楽しめます。(MM形カートリッジイコライザー MCE-70が必要)

- ●専用外部スピーカー、APS-80 別売り 2本セット￥11,800
- ●レコードプレヤーHT-320 別売り ￥25,800(レコードプレヤーを接続するにはMM形カートリッジイコライザー〈MCE-70〉別売り ￥4,500が必要です)

▲上の写真はステレオパディスコ8030をシステムアップしたものの一例です。

★カセットレコーダーで録音したものは、個人として楽しむなどのほかは著作権法上、権利者に無断で使用できません。
★商品のお問合せ、クレジットのご相談、カタログのご請求は、お近くの日立の家電品取扱店へお気軽にどうぞ。

品質を大切にする〈技術の日立〉
HITACHI CASSETTE RECORDER
HITACHI

日立家電販売株式会社 〒105 東京都港区西新橋2-15-12(日立愛宕別館) TEL(03)502-2111
日立クレジット株式会社 〒105 東京都港区西新橋2-15-12(日立愛宕別館) TEL(03)503-2111

★「日立カセットレコーダーの保証書」は必ずお受けとりください。お買い上げの際に、販売店名、ご購入年月日が記入されているかを、お確かめになり、大切に保存してください。

5月末に「財団法人・日本協会」設立へ

四十二年の歴史を刻んだ日本ハンドボール協会が発展的解消をし、新たに財団法人・日本ハンドボール協会が早ければ、本年5月31日に設立される見通しとなった。

2月23日の全国理事会(熱海)、24日の定期全国代議員会（東京）で執行部が明らかにしたもの。日本ハンドボール界は、2カ月後、画期的な〝新年〟を迎える。

財団基金

当面目標額三千万円に達す

日本協会の財団化は、日本体協の加盟競技団体への要望をきっかけにして、48年度から検討が加えられていたもので、7年ごしの懸案実現である。

具体的な財団化に必要な資金募集は、53年に正式スタート、当初は「3年計画」で、55年度下半期に見通しをつけ、56年4月1日付で財団発足を予定していた。

しかし、すでに、日本体協加盟42競技団体のうち30団体が財団または社団法人化されていることなどがあって、斎藤会長、林副会長荒川理事長、島田財団法人担当常務理事らが中心となり、積極的な募金活動を展開、今年1月末現在二千二百十万八千円が集った。

日本協会は、4月末には、当面法人化に必要な最低金額三千万円に達すると判断、3月31日東京で発起人会を開催(後掲)、ただちに文部大臣あて設立許可申請書を提出することになったものである。

大野総務担当常務理事の話では順調に手つづきが進めば、5月31日に設立許可がおり、6月21日東京で、財団法人・日本ハンドボール協会の設立式典を開く。

発起人会メンバー決まる

日本協会は、2月24日東京で開いた定期全国代議員会で、財団化のための設立発起人会の発足を承認、発起人として、次の29氏を決めた。発起人会議は3月31日。

【財団法人設立発起人】▽代表 斎藤英四郎（日本協会々長）▽副代表 林達夫（日本協会副会長）▽委員 石切山稔治、森恭一、若山博、入江暢一、伊藤和夫、中井泰彦、平田幸男、越智武、藤田八郎(以上地方協会代表)、山田稔、中沢重夫、遠藤健次、清水正、富永劭(以上加盟団体代表)、湧永儀助 池上秀男、平田源一、鈴木雄毅(以上日本リーグ代表)、荒川清美 大野金一、北川勇喜、西村孝雄、境井秀三、島田清史、平岡秀雄、大西武三、安藤純光（以上日本協会代表)

財団設立とオリンピック入賞にかけて

日本ハンドボール協会々長 斎藤英四郎

日本ハンドボール協会にとって一九八〇年は、一時期を画する年になります。

財団法人・日本ハンドボール協会の設立は、二年足らずで、当面の基本財産の目標額三千万円に達し、ようやく、設立許可申請にこぎつけることができました。

ただの草野チームの集まりではなく、毎年数千万円の予算を動かす全国規模の団体である以上数千万円の基本財産を保有することは、社会的存在として当然のことでしょうし、今までも基金はもたずとも厳正に管理運営されてきておりますから、財団法人になったからといって全く様変りするわけではありませんが、新生財団の誕生を機に、人心を一新し、より一層飛躍する心構えは必要です。

目下のところ、基本財産に拠出された方の数は必ずしも多くありませんが、新生財団に総意を結集していただくために、第二ラウンドの目標五千万円に達するまで、できるだけ多くの方のご理解とご協力をお願いする次第です。

財団設立と期を同じくして、わが男子ナショナルチームがモスクワ・オリンピックの出場権を獲得したことは、まことに慶びに堪えません。

ボール競技がみなアジア予選で敗れている中で、ハンドボール競技が二つの予選を勝ち抜いてオリンピック出場できることになりましたことについては、選手諸君を初め、関係各位のご努力に対し厚く御礼申し上げる次第です。

このことは、ハンドボール競技そのものに国民の皆さまの関心を寄せていただく絶好の機会であり、数多くの国民のご声援をお願い申し上げます。

（新日本製鉄社長）

『ハンドボール』

55年4月号(第184号)目次

【表紙写真】第3回全国高校選抜大会女子決勝・小松市女×市邨学園戦
（3月28日、徳山市体育館）
【スポーツ・イベント提供】

昭和55年度を迎えるにあたりて

昭和55年度の日本協会運営方針は，２月23日の全国理事会，24日の定例全国代議員会でも述べたとおり，特に，従来の基本方針と大きく異る点はない。

ただし，55年度はオリンピックイヤーであり，前期は，オリンピックに向けて，頂点強化を最大目標とし後期は，財団法人としての活動を軌道にのせるべく全力をつくしたい。

55年度を迎えるにあたって所信を記し，全国諸賢の理解，協力をあおぎたい。

日本ハンドボール協会理事長　荒　川　清　美

日本協会財政

財団法人化の見通しはついたものの、日本協会の財政問題、財源問題は、いぜん、大きな課題として横たわっている。

55年度の歳入・出予算総額は四、八一二万円で、このうち、国内事業への予算は、全体の30％にあたる一、四七五万円を見積っている。

この額には、各種大会補助三三三万円が含まれており、残り一千万円強が、審判、普及などの事業に振り分けられるわけだが、物価の高とうなどもあり、充分な額とはいえない。

事業を総合的、効果的に推進していく必要があり、各事業を展開するにあたっては、関係役員、担当役員間の連けいを、いっそう密にしたいと考えている。

◆昭和55年度予算◆収入▽負担金二、八五〇▽補助金八、六七〇▽委託費五〇〇▽事業収入二六、四〇〇▽寄付金九〇〇▽雑収入一、八〇〇▽前年度繰越七、〇〇〇

▼支出▽加盟金六六〇▽事務局費一五、二七二▽編集委員会費一〇、一五八・一▽事業費一七、七五四▽委託事業費七〇〇▽日体協負担金三四二▽予備費六、二三四＝単位千円(詳細7頁)

国内重点事業

◇クラブチーム対策　社会人層一般市民層へのハンドボール侵透を企てることを、今年度、積極的に研究したい。

既存の各クラブ間に「全国大会開催」のニーズが高まっているようなら「全国クラブ大会」(仮称)の開設も検討するが、ともかくも早急に、全国の〝クラブの実態〟を掌握するつもりでいる。

そのうえで、クラブ育成の組織化と総合的な実施方法の具体策を煮つめる。

◇レフェリー・ソサイエティ　国内の審判活動、審判網といったものは、一応、整備されたと考える。

今後は、より指導現場(競技者)とレフェリングの関連研究を進めるとともに、国際舞台への進出をはかりたい。

語学力をもつ若手レフェリーを〝重点育成〟することなども具体化させたい。

◇強化関係、頂点強化構想については、別項で詳述するが、国内全般のテーマとしては、ジュニア・クラスの強化を組織化したい。

これまでは、多くの少年たちにハンドボールを愛好してもらうことを第一義としてきたが、今後はこの面と併せて、それらの愛好者の中から、素質のある〝選手〟を見つけ出し、日本協会が、長期的組織的に育成し、国際レベルの競技者を生みたい。

その第一段階として、今春四月早々、全国各ブロック別に「ジュニア強化講習会」を開き、さらに五月には、東日本、中日本、西日本の三大パートに有望選手を集結させたキャンプを行なう予定である。

国際関係

一九七〇年代に示した世界のハンドボールの成長は、驚くべきものがあった。

国際ハンドボール連盟(IHF)加盟国は、昨冬、仮加盟した中国が八十番目。

これを地域別にみると、ヨーロッパ30、アフリカ26、アジア18、アメリカ大陸6となる。

これまでは、日本は、本場ヨーロッパと離れずの立ち場をとり、ヨーロッパ各国も、日本をハンドボールの世界普及への一つの〝橋頭堡〟のように考えていたが、今後は、ヨーロッパとの関係を保ちながら、アジアに重点的に目を向ける必要が大いにある。

そのためには、アジアハンドボール連盟(AHF)内で、日本の地位を確立することが急務と考えている。

また、拡充したアジアハンドボール界内の整備も、日本が中心となって行わねばなるまい。

特に、アジア選手権、世界選手権アジア予選、オリンピックアジア予選の〝統合〟や、アジア競技大会との関連などは、できることならば、次回の世界選手権予選(一九八一年に予定)までに、一つの方向を見つけ出すべきと考えている。

また、国際事業に関連して、世界情勢の掌握にも、いっそう力を注ぎたい。

国際部門を増員し、書類翻訳、手つづきだけではなく、情勢分析時代の先どりなど、積極的な手を打ちたい。

頂点強化対策

◇強化部の組織簡素化　昭和五十二年度から「強化部」の確立を企り、同部を小協会組織として考え、強化委員会、総務群、男子強化群、女子強化群、コーチ群、トレーニングドクター群を設けてきたが、卒直のところ「屋上屋」を重ねた感があった。

これを、より機能的にするため簡素化を企ることとした。

実施は、モスクワ後とも考えたが、一日も早い着手が、今後の向

上につながると思い、今春四月以降、男女強化委員長のポストを取り払い、昨年から男女プールとしていたコーチ群を、再び、男女別に戻すこととした。

この結果、男女ナショナルチームの監督は、強化部長と〈直結〉することになり、男女に分かれたコーチ群は、監督と一本の線でつながられる。

強化委員会は、部長―監督―コーチラインの諮問機関とすることが、将来、考えられるだろう。

総務コーチ群は、早急に人材を強化したい。

トレーニングドクター群は、監督、コーチとつねに一体となり、ジュニアを含めた強化策をねることとするのは、これまで通りだ。

ジュニア問題については、前述のとおり、選手の発掘網を組織化するが、指導陣も早急に編成するつもりだ。すでにジュニアに対する統一した「指導要領」は完成しており、「ナショナルジュニアナショナル」の一貫化に踏み出したい。

男子は、昨年につづき木野実コーチを、今シーズンから、正式に「ジュニアナショナル監督」として、女子はコーチに交渉中の井薫氏（立石電機監督、前全日本女子監督）に就任してもらう。

なお、こうした頂点強化事業の拡大にともない、コーチ群も、あらゆる分野から人材を登用することとし、これまでの十二コーチのほか、現在、井氏を含む十二氏に新任を交渉中である。

◇男子ナショナルチームの強化方針＝モスクワ・オリンピックでの6位内入賞を最大目標とする。

モスクワへの体制は、竹野奉昭監督、東嘉伸コーチに一任してあるが、四月の東ドイツ・中国遠征で、いっそうチームがたくましくなることを期待している。

スケジュール的には、七月までを前期、オリンピック終了後を後期として、前期は、さらに、中国東ドイツ遠征を第一期、帰国後の国内合宿と二つの国際シリーズ（サウジアラビア、オーストリア・U・クレムス）による第二期に分けたい。

第一期と第二期の中間に「ナショナルチームの選考措置期」を設け、PRと強化と普及を兼ねて、5月5日の大阪大会を第一戦に、西日本各地区を主体に「オリンピック選手選考シリーズ」を行うことにしている。

オリンピック代表選手の発表は5月20日ごろになろう。

オリンピック後の後期は、9月にモスクワオリンピック優勝国招待シリーズを開き、日本の力量を評価し、将来の展開に備えたい。

そのあと、ナショナルチームの手なおしを行ない。10月に朝鮮民主々義人民共和国（北朝鮮）への遠征を行ないたいと考えている。

この遠征は、八二年の第10回世界男子選手権（西ドイツ）への、最初のスタートになるべきものとしたい。

◇女子ナショナルチームの強化方針＝アジアでの王座奪還を最大目標とする。

そのためには、女子特有の条件を加味しながら、新しい強化方針を立てる必要があり、心機一転の池田鉄哉監督をリーダーとした新コーチ陣の再建策に望みを託したい。

その第一歩として、これまでまったく交流のなかった中国女子と対戦できるのは、ありがたい。

中国は、韓国とともに、日本がアジアのトップに立つためには、どうしても突破しなければならぬ壁になるものと、私は想う。

なお、チェコ、ハンガリーなどとの折しょうがまとまれば、5月に東ドイツからの招待をうけて、東欧遠征も検討中である。

（3月18日）

◆昭和55年度全国大会日程

▽全日本男子オリンピック代表選考シリーズ	5月5～20日	国内各地
▽第21回全日本実業団女子選手権	6月5～8日	愛知県体育館
▽第7回全国高専選手権	7月29～30日	長野県
▽第31回全日本高校選手権	8月1～7日	愛媛県宇和島市
▽第23回（女子第8回）全日本教職員選手権	8月8～12日	滋賀県彦根市
▽第9回全国中学校大会	8月21～24日	熊本市
▽第30回(女子第12回)全日本学生選抜東西対抗	9月15日	京都府立体育館
▽第21回全日本実業団男子選手権	9月1～3日	大阪市中央体育館
▽第12回全日本自衛隊選手権	9月	東京（駒沢）
▽第5回日本リーグ	9月21日開幕 11月30日終幕	全国各地
▽第35回国体ハンドボール競技	10月13～17日	栃木市
▽第23回（女子第16回）全日本学生選手権	11月3～7日	大阪市中央体育館
▽第32回全日本総合選手権	12月16～20日 又は12月17～21日	東京体育館
▽第12回全国実業団男子トーナメント	56年2月	神戸市
▽第4回全国高校選抜大会	56年3月25～27日	名古屋市

◆昭和55年度日韓交流

▽第8回社会人男子（予定）	6月	韓国チーム来日＝54年度事業
▽第14回（女子第7回）高校	8月17日東京，19日埼玉	
▽第9回社会人女子	56年2又は3月	韓国チーム来日
▽第9回社会人男子	未定	日本チーム遠征

◆昭和55年度国際交流

▽第4回日本・東ドイツ交流　全日本男子派遣　4月1～9日

▽第3回日本・中国交流　全日本男子派遣　4月10～24日

▽第1回日本・中国女子交流　全日本女子派遣　4月10～24日

▽第5回日本・東ドイツ交流　全日本女子派遣検討中　5月11～25日

▽オーストリア「ユニオン・クレムスHC(男子)」来日予定　6月　全国各地

▽サウジアラビア男子ナショナル来日　6月20日～7月12日　全国各地

▽第8回テラモ（イタリア）ユーストーナメント　全日本男女ジュニア派遣　7月4～8日

▽モスクワ・オリンピック　7月20日～30日　モスクワ

▽全日本男子北朝鮮遠征　10月3～10日（内定）

▽第8回世界学生選手権（男子のみ）　12月28日～1月10日　フランス（予定）

◆その他の国際事業

▽第3回AHF通常総会	4月12～13日	ホンコン
▽第18回IHF定期総会	7月15～17日	モスクワ

◆検討中の国内事業

▽モスクワ・オリンピック代表選考サーキット	5月	大阪ほか
▽財団法人記念式典	6月21日	東京体育館
▽モスクワ・オリンピック優勝国招待シリーズ(NHK杯)	9～10月	

全日本男子、中国・東ドイツへ遠征

～女子も中国と初の交流・強化部～

「男女委員長制」「共通コーチ」は廃止

日本協会強化部は、3月16日東京で強化委員会を開き、今年度の頂点強化日程のほか

①全日本男子（モスクワ・オリンピック候補チーム）を、3月31日から、第4回日本・東ドイツ交流として東ドイツへ派遣、引きつづき4月10日から24日まで第3回日本・中国交流として中国へ派遣する。

②全日本女子を新編成して、4月10日から24日まで第1回日本・中国女子交流として中国へ派遣する。

③強化部機構の一部手なおしとして、男女別強化委員長制を廃止。コーチ群も、1年間施行した男女プール制を廃止し男女別に区分する。

④コーチ群（男女）の補充を行なうが、女子コーチに緒方嗣雄氏（大和銀行監督）の起用をまず決定。

⑤全日本女子ジュニアのヘッドコーチ（監督）に井薫氏（元全日本女子監督）を委嘱する。（注・男子ジュニアは、従来どおり木野実氏）

⑥荒川理事長の強化部長兼任は、モスクワ・オリンピック終了までとし、同大会後、ただちに、新部長を選任する。

などを決めた。

荒川強化部長の説明では、これらの決定は、いずれも2月の全国会議（理事会、代議員会）で、基本案が示され、同意を得ていたものである。

◇全日本男女の中国、東ドイツ交流（遠征）

昨冬のアジア予選をきっかけとして、日・中間は、急速に復交。中国協会は、日本から帰国後、ただちに、日本招待を具体化したものだ。

日本協会は、当初、昨秋の第2回アジア選手権(南京)、アジア予選と、わずか2カ月間に、2回の交流を行ったただけに、今回の招へいを、モスクワ終了後に延ばすことを希望していたようだが、下半期の国内日程や、朝鮮民主々義人民共和国(北朝鮮)からの招へい、コーチングスタッフからの要望などが重って、中国側の望む4月遠征を決めた。

この計画と前後して、強化部独自の構想で、オリンピック強化のため、東欧遠征を企画、東ドイツから、第4回交流として招待OKの返信があったため、中国遠征とドッキング、約3週間にわたるかっこうの強化ツアーができあがった。

いまのところ、中国では、北京、合肥、上海の3都市で6試合（女子も同じ）、東ドイツでは5試合が予定されている。

遠征メンバーは、昨春の西ドイツ・オーストリア遠征以降、四つの国際シリーズを戦い抜いたメンバーが、当然のように主軸となっているが、次代へつながる若手、中堅にキャリアをという竹野監督と東コーチの構想から辻本（大阪イーグルス）仲田（千葉教員）を加えているのが注目されよう。

なお、モスクワ・オリンピックの〝日本戦法〟の担い手として期待されている関(三陽)と山本（湧永）は負傷のため、GK井藤（日体大）は、関東学生のヨーロッパ遠征直後のため、国内で、じっくり調整することになり、今回の遠征には参加しない。

一方、女子は、アジア予選での敗退によって、沈滞が心配されていた矢先だけに、中国からの招へいは、願ってもない〝再起〟のチャンスといえる。

予選敗退後、1月に予定された強化部会、コーチ会が流会同ようになったことなどから、新路線が明確に打ち出されていず準備不足の声もあったが、荒川強化部長（日本協会理事長）は、強化委員会前、池田全日本女子監督と談合、一気に、中国遠征への足固めを行ない、発表にこぎつけたものだ。

メンバーは、荒川―池田構想といわれる「一九八八年のロスアンゼルス・オリンピック出場を、当面の最大目標とする」という線にそい、思い切った若返りをみせた

中国女子は、一部で「まだ行われていない」などのみかたもあったが、すでに、かなりの実績を積んでおり、昨冬のオリンピック予選にも、一応、出場の態勢を整えていたと伝えられる。

荒川強化部長は「早ければ来年の世界女子選手権予選(詳細未定)には、登場してくると思うし、いまのうちに交流をしておくのは、大きな意味がある」といっている

なお、女子も、男子同よう東ドイツから、5月に招きたいとの声がかかっているが、中国遠征後、日がないことから、日本協会は辞退の意向である。

◇強化部機構の手なおし

昨年5月、渡辺(慶)部長の辞任以後、「新しい方針を、いずれ発表したい」といっていた荒川部長(理事長)が示した〝改革案〟は機構内の簡素化に重きをおいている。

これまでは、男女とも現場(監督、コーチ陣)と強化部長の間に、さらに、男女強化委員長というポストをおいていたが、これでは現場の声が間接的になるため、両委員長制廃止という思い切った手に出た。

男子・幸田、女子・柳井両委員長は、これまで現場を助けてマネージング、あるいはジュニア関連の業務を受けもち、地味ながら、3年前に示された「強化部の独立」という方向に沿って、成果をあげていただけに、単に、風とおしをよくするためという理由で、両ポストを廃止することは、強化部内でも議論はあったようだが、「屋上屋を重ねては、現場の活動が渋滞する」という荒川氏の意見が結果的には支持された。幸田、柳井両氏は今後、強化委員となる。

コーチ群の男女振り分けは、一昨年11月、強引に〝男女プール制(共通担当)〟を施行したあとだけに、卒直のところ、その無定見ぶりが攻められる。荒川部長も、その非を認めているが、「撤退するなら早いうちに」という考えからわずか1年5カ月で旧に戻した。

この結果、現在、コーチ群に所属している12人を、男子担当として東、近森、木野、早川(在西ドイツ)、野田、市原、本田の各コーチ、女子担当として白神、伊藤、樫塚、谷口、高野の各コーチに分けることとなった。さらに今後のナショナルチームは、これまで以上に、多角的な指導と研究分析が不可欠との判断から、コーチ群の補充を行うことになり、新たに男子コーチとして4氏、女子コーチとして8氏をノミネート、各氏に交渉後、全スタッフを発表することでまとまった。

ただし、4月の中国遠征には、荒川部長のコーチングスタッフも新鮮味をという要望から、緒方嗣雄氏(大和銀行監督、日体大出、旧姓・森)の起用が決まり、同氏も承諾したことが明きらかにされている。懸案の強化部長は、荒川氏から「モスクワまで兼任する」旨が述べられ、了承された。

◇全日本ジュニアコーチ

ジュニア世界選手権の定着、さらには同選手権も地域予選の施行必至とあって、ジュニア・ナショナルの組織化をより強化することになり、男子は、これまでどおり木野氏(昨年の男子世界ジュニア選手権監督)に一任、女子は池田全日本女子監督の兼任を解いて(注・昨年の女子世界ジュニア選手権は、白神コーチが監督をつとめた)、新たに、井薫氏(元全日本女子監督、立石電機監督、中大出)を委嘱することとした。

全日本男女遠征メンバー

日本協会は、第3回日中交流、第4回日本・東ドイツ交流に派遣する全日本男子と、第1回日中女子交流に参加の全日本女子のメンバーを、3月28日、次のように発表した。

男子は、昨年6月決定された54年度ナショナル(モスクワオリンピック候補)29人のなかからピックアップされた16人、女子は、昨年7月発表された全日本女子ジュニアから7名を〝昇格〟させたほか、GK山本一(ジャスコ)を抜てきしたのが目立つ。

東ドイツ・中国遠征全日本男子

・団　長　伊藤　和夫(日本協会理事)
・監　督　竹野　奉昭(日本協会強化委員)
・コーチ　東　嘉伸(日本協会強化コーチ群)
・総　務　松浦　滋(日本協会上級コーチ)

・GK

福井　秀人	(28才・	湧永薬品)	180cm	㉛
岡部　大	(25	大崎電気)	182	③
大畑　孝広	(23	本田技研鈴鹿)	184	⑤

・FP

津川　昭	(28	湧永薬品)	180	㊲
穂積　豊彦	(28	湧永薬品)	180	㊿
大原　真造	(27	大同特殊鋼)	175	⑩
斉藤将一郎	(26	湯沢ク)	187	㉚
斉藤　幸司	(26	大崎電気)	174	㊶
柳川　実	(26	大同特殊鋼)	175	㊹
蒲生　晴明	(25	大同特殊鋼)	192	(73)
中本　満明	(25	大同特殊鋼)	184	㉟
生駒　靖夫	(24	湧永薬品)	185	⑦
池ノ上孝司	(24	湧永薬品)	185	㉔
辻本　孝仁	(24	大阪イーグルス)	177	①
志賀　良弘	(23	湧永薬品)	187	⑲
仲田　稔	(22	千葉教員)	184	初

中国遠征全日本女子

・監　督　池田鉄哉(日本協会強化委員)
・コーチ　緒方嗣雄(日本協会強化コーチ群)

・GK

□山本　一枝	(21才・	ジャスコ)	167cm	初
井村文光子	(20	立石電機)	170	②
矢部登茂子	(20	ジャスコ)	172	④

・FP

染谷　保子	(23	日本ビクター)	164	⑤
西　典子	(22	大崎電気)	168	初
島田さゆり	(22	日立栃木)	171	⑥
桑原　広子	(21	立石電機)	163	初
□植田　和子	(21	ブラザー工業)	155	①
伊藤　珠美	(21	日本ビクター)	159	②
□姫野五十鈴	(21	立石電機)	153	初
水上　清美	(21	日立栃木)	166	①
□寺西富美枝	(20	東京重機)	168	初
□八木千津子	(20	北国銀行)	155	初
□辻本　典子	(20	ジャスコ)	166	初
□山本二三代	(20	ジャスコ)	161	初
□山村　雅子	(20	ブラザー工業)	159	①

・○内数字は公式国際試合出場数
・□印は初の全日本入りを示す

報告

全国理事会（2月23日）
全国代議員会（2月24日）

日本協会は、去る二月二三日に全国理事会、翌二四日に代議員会をそれぞれ開催して、昭和五五年度の予算と事業計画を決定しました。

◆昭和五五年度予算

昭和五五年度予算は別表（本誌次頁）のとおりです。

日体協の補助、委託費が内示されていないので、補助、受託事業はほとんど計上されておりません

補助金、委託費収入を除いた日本協会の経常　収入は、試合日程を後期のみに絞った日本リーグの開催権料の減収とルールブック売上収入増が相殺されて、前年度とほぼ同じ収入予算となっております。

したがって、支出の方も事業はほとんど前年度と同様になっております。前年度からの繰越金を七〇〇万円と見込んでおりますが、今後日体協の補助、委託事業の内示があれば日本協会の負担金も増えてきますから、そのための予備費を計上しております。四月には早速男子ナショナルチームの東独・中国遠征が、女子ナショナルチームも男子と中国で合流、五月には単独で東独へ遠征します。

なお、二年前に三カ年計画で発足した財団化の募金も当面の第一次目標額の三千万円に到達したので、発起人会議の決議を経て四月早々設立許可申請をし、六月には正式な許可が下りるものと予想しておりますが、日本ハンドボール協会の資産、事業は新財団がそのまま承継しますので、この日本協会の昭和五五年度予算は、このまま新財団の予算として引き継がれることとなるでしょう。

◆昭和五五年度事業計画

昭和五五年度の事業計画は別紙（本誌3頁）のとおりです。

前記のとおり、七月のモスクワ・オリンピックに全精力をつぎ込むために、日本リーグの日程を後期のみに絞り、男女とも一回総当りになりました。

六月二一日（土）に東京体育館で、男子ナショナルチームのモスクワへの壮行試合を、その前月に大阪、名古屋などで選手選考を兼ねた試合を強化合宿の前後に開催して、オリンピック気運を盛り上げる予定にしております。

また、この三月中に財団設立発起人会議を開いて設立許可申請に必要な事項を決定し、四月早々許可申請を文部大臣に提出する予定で、六月二一日のオリンピック壮行会までには設立許可を貰って、同日設立記念パーティを挙行する計画になっております。

昭和五五年度事業計画は、財団法人設立が許可になった場合は、そのまま新財団に移行して実施されることになるでしょう。

◆全日本総合選手権について

全日本総合選手権大会は、各地域（ブロック）代表で日本選手権を争うべきであるという基本構想のもとに、漸次その方向に近づけ第三二回（昭和五五年度）大会からブロック対抗に移行することを目標として、三年前から、日本リーグ、学連代表の他に東、中、西日本から各一チームの社会人代表を加えて暫定的、試行的に実施してきました。

ところが、現実には日本リーグのチームと前記地域代表（クラブチーム）との間に格差がありすぎる、実連、学連などのワクが現存する以上、ヨーロッパの制度に近い前記構想を実現するには無理がある、など困難な問題があり、日本リーグの国体参加の是非、クラブチームの育成、組織化などの懸案の問題とも複雑に絡むので、これらの問題と併行して更に慎重に検討していく。したがって昭和五五年度の総合選手権大会は従前どおりの要領で実施していく、という執行部の提案が今回の代議員会で了承されました。

◆国体のローティション

国体に輪番で全県参加できる種別を成人男女に限るか、少年男女も含めるか、過去四年間成人男女の間でローティトしてきたが、昭和五五年度（第三六回）以降どうするか、について今回の代議員会に付議されましたが、取あえず三六回は成年男子、三七回は成年女子とすることに決定されました。

日本協会が都道府県協会から参考までにアンケートによりとった意見（回収率七二・三％）では、成年男女の隔年ローティション支持四七・一％、成年男女、少年男女四種別のローティション支持五二・九％で、今回の代議員会でも種々の意見が出されました。

成年男女に限る意見の根拠は、過去四年間成年男女のローティションにした理由と同様、まだ成年女子の育成を最重点にすべきだ。少年は他にインターハイ、選抜大会など全国大会など全国大会出場の機会が多い、というものです。

これに対し、成年女子に機会を与えても、日本リーグチームの存する地域では、クラブチームは育たないし、本番でも日本リーグチームとの格差がありすぎて、地方体協などが出場を制限する場合もある。全県出場の翌年には登録チームが減少する傾向がある。などの消極説も出たが、成年女子の育成には多方面から力を入れることにして、取敢えず二年間は成年男女のローティションにすることになりました。

（大野）

〝〝〝〝〝〝〝〝

日本協会最後の全国会議

〇…本誌1頁所報のとおり、日本協会の財団法人化がほぼ決定、23、24日の全国会議は、いわば、日本協会にとっての〝お別れ会議〟となった。

そのためか、両会議とも、いつになく熱っぽい協議がつづいたが財団法人化のあとは、現規約がいっさい廃棄され、新たに「寄付行為」が設定されることになる。

当然、執行部などの機構も、大幅な修正となるが、これまでに〝法人化〟した競技団体の例をとると、まず、代議員会は評議員会と改称され、会長、副会長も理事となるのが大きな特色。

理事長という役職名も専務理事と改められるほか、各都道府県協会の立ち場も、現在の組織団体から加盟団体に変わる模様だ。

昭和55年度日本協会予算書

収入の部

科目	予算額	説明
1. 負担金	2,850,000円	加盟金（県協会・団体）
2. 補助金	8,670,000	日体協補助金（教育系大学研修会，強化合宿他）
3. 委託費	500,000	日体協委託強化コーチ巡回指導委託金
4. 事業収入	26,400,000	
登録料	9,000,000	団体（5,800,000），個人（3,200,000）
検定・審査料	5,400,000	公認料・審査員審査料
開催権料	1,000,000	日本リーグ開催権料
機関紙購読料他	11,000,000	購読料・広告料
5. 寄付金	900,000	オリンピック寄付金
6. 雑収入	1,800,000	物品売上収入（審判用バッグ・手帳，ルールブック）
前年度繰越金	7,000,000	
合計	48,120,000	

支出の部

科目	予算額	説明
1. 加盟金	660,000円	ＩＦ加盟金，体協加盟金・ＡＦ加盟金
2. 事務費	15,272,000	
人件費	4,490,000	給料，賞与，通勤手当
運営費	5,412,000	消耗品，印刷製本，通信運搬，借料，会議費，役員旅費
旅費	3,840,000	
渉外費	400,000	
雑費	600,000	
保険料	150,000	
賞杯費	380,000	
3. 編集委員会費	10,158,100	嘱託費，旅費，会議費，印刷製本費
4. 事業費	14,754,000	
団体補助・大会費	3,330,000	加盟団体補助費，大会費
教育系大学研修会	1,450,000	旅費，借損料，諸謝金，受講者補助，雑費
公認コーチ講習会	360,000	旅費，印刷費，雑費
普及関係諸費	700,000	印刷費，旅費・会議費
ＡＢ級公認審判	326,000	担当者旅費，食費，会場使用料
公認審判中央研修	270,000	旅費，開催費補助
公認審判地方研修	216,000	旅費（愛媛・彦根・栃木）
ＪＨＡレフェリー	600,000	旅費，借損料，雑費
審判関係諸費	642,000	旅費，会議費
技術委員会費	430,000	ミニハンドボールの総合研究他
強化合宿費	4,000,000	
チーム派遣費	1,200,000	
強化部諸費	1,230,000	
5. 委託事業費	700,000	日体協委託事業（強化コーチ巡回指導旅費）
6. 日体協負担金	342,000	選手強化事業負担金（強化担当コーチ設置費）
7. 予備費	6,234,000	
合計	48,120,000円	

国際大会（ジャパン・カップ）と全国クラブ大会

日本協会、二つの懸案を推進

日本協会は、2月の全国会議で、二つの画期的な構想を明らかにした。

一つは、財団法人化を記念する国際トーナメントの企画

一つは、「全国クラブ大会」(仮称)の実現検討である。

どちらも、永年、愛好者が待望している事業。

今後の見通しなどを探ってみた。

財団法人化を記念しての国際トーナメントは、企画担当の北川勇喜常務理事によれば「ジャパン・カップ」の名のもとに、来年度実現を目指すという。

すでに、4月末には、推進プロジェクトチームの発足が内定している。

これまで、日本での国際試合はすべて、外国から一チームを招いての、単発シリーズだった。

数年前から、関係者、愛好者の間で、本格的な国際大会開催の要望が強まり、それがエスカレートして、ある時期、男子世界選手権誘致が、真けんに研究されたこともあった。

しかし、世界選手権は、二億円近い費用が必要とあって、いつの間にか、その話も立ち消え、代って、国際トーナメントが、身近なテーマになった。

財団法人化は、こうした大事業をおこすには、絶好のチャンスであり、これまでの机上論から一歩進んだものとして、大いに期待される。

いまのところ、プロジェクトチームそのものの内容も明らかではなく、まだ、ほんのスタート台に立つばかりだが、この構想には各所から〃支持〃の声がとんでいる。

大会規模や、期日、実施方法などは、まだ白紙だが、ヨーロッパの国際トーナメントの例をとるなら、最少四カ国参加のリーグ戦、その上となれば六カ国または八カ国だ。

六、八カ国の場合、ホスト国・日本は2チーム（シニア、ジュニアナショナル）を出場させるのが〃常識〃で、外国チームの数は、四、六カ国となる。

もちろん、予想される難関も多い。経費（一国一千万円見当）と運営者の人材は、なかでも大問題だし、「このような企画を行うならアジア選手権を引き受けることを優先すべきだ」という声も、聞き逃すわけにはいくまい。

推進プロジェクトチームが、どのように動き、世論の高まりを、いかに抽き出すかもカギだろう。

まずクラブの実態掌握

〃クラブの集結〃は、すでに十年を越す課題だ。

この分野を担当する歴代の日本協会普及部のリーダーたちは、あらゆる面から〈クラブ〉を分析しその措置に検討を加えたが、八年ほど前に「クラブの基準」を草した以外、目につく行動を実らしていない。

この間、各都道府県協会が、クラブや社会人球界に、独自の路線を敷きはじめ、特に岐阜協会が女子の、静岡協会が男子の「全国クラブ大会」を主催したのは、注目を集めた。

日本協会も、この二つの活動に大きな刺激をうけ、市民スポーツ運動の高まりや、国体のオープン化などもあって、昨年あたりから再び、クラブの「全国大会」構想に取りくみはじめた。

荒川清美理事長は、日本協会がいぜん、全国のクラブの実態を掌握しきれていないため、55年度は日本協会加盟、非加盟にかかわらず〈クラブ〉の完全調査を進めることとし、そのうえで新しい方針を打ち出す考えのようだが、一部のクラブ関係者は、遅くとも56年度には「全国クラブ大会」を、日本協会が主催することを、強く要望しているという。

この企画に関連して「国体成年部門における日本リーグ勢の取り扱い」「全日本総合選手権の予選組織化」といったテーマの〃解決〃も、迫られており、〃クラブの位置づけ〃が、はっきりすれば、球界事業全般が、大きく様相を変えることも予想される。

なお、55年度の全国クラブ大会は、これまでの岐阜、静岡両県から離れ、男女とも京都府舞鶴で行われる予定。（期日未定）

岩国工、小松市女が優勝

全国高校選抜

【速報】第3回全国高校選抜大会は、3月26日から28日まで、山口県の徳山市体育館を主会場に、全国から男女各10校の代表が集まりトーナメント法式で行われた。

男子は、第1回優勝の地元・岩国工（山口）と、第2回優勝の中大付属（東京）が、苦戦をつづけながらも勝ちあがり、決勝戦で対決、中大付が前半巧みにリードを奪ったが、岩国工は、後半、得意の速攻で、同点—逆転、2年ぶり2度目の優勝を決めた。

女子は、小松市女(石川)×市邨学園(愛知)の優勝争いとなり、PTで先行した小松が、前半、ポストプレーを成功させリードを拡げた。

後半、市邨は、激しい追いあげをみせたが、前半の傷口をふさぐには、反撃が遅すぎた。小松は2連勝。

〜詳報次号〜

▽男子決勝

岩国工（山口） 15（6−8、9−6）14 中大付属（東京）

▽女子決勝

小松市女（石川） 14（10−5、4−7）12 市邨学園（愛知）

世界ジュニアの日程

IHF（国際ハンドボール連盟）は、第3回世界ジュニア選手権の日程を次のように決め発表した。

男子＝81年（昭56）12月1〜15日・ポルトガル、女子＝81年10月15〜30日・カナダ

◇日本協会加盟団体リポート＜全日本学生連盟＞

全日本学生 男子は24校で実施 女子は12〜16

全日本学生ハンドボール連盟定例総合役員会は、三月十六日午前十一時から岸記念体育館において行なわれた。会議の審議に先きだち、内海倫全日本学連会長より、挨拶があり、五十四年度学連行事の全日程が役員各位のご努力で無事終える事が出来たについての謝辞が述べられた。

引き続いて審議に入り、

(一) 昭和55年度全日本学連主要行事日程

(1) 西日本学生選手権、6月28日〜7月1日、山口県徳山市

(2) 東日本学生選手権 8月12日〜16日 東京、駒沢体育館他

(3) 全日本学生選抜東西対抗戦 9月15日 京都府立体育館

(4) 全日本学生選手権 12月3日〜7日 大阪市中央体育館他

(二) 全日本学生選手権大会参加チーム数と試合方法について

兼ねてからの懸案であったこの件は、すでに数年にわたり討議を続けて来たが、まず参加校数について本年は次の通りの方法を経て実施する事を決めた。

男子は、参加チーム総数24チームとし、出場割当数は各地区学連より1チーム、の計8地区8チームとし今年のように西日本地区でこの大会が開催の場合は、西日本学生選手権上位より8チーム、東日本学生選手権上位より7チーム（東日本地区で開催の場合は上記の数は、東日本8、西日本7とかわる）、開催地代表1チーム、計24チームとする。

女子については、参加総数16又は12チームとし、いずれかを次回会議にて決定する。試合方法については、次回会議で審議し決定する。これにより、各地区学連リーグ→東日本又は西日本学生選手権→全日本学生選手権につながり大会内容のより充実と、大会の意欲ある盛り上りを考えた。この方法によって、東日本・西日本両学生選手権も今迄の様に任意参加の形の強かった大会を、この際両大会の開催内容の統一を計り、もっと充実させる必要があり再検討する事とした。

(三) 日韓学生交流について

本年は隔年の休み年に当る為開催はない、明年以後の開催については全日本学連として一昨年来、韓国側に提案している「遠征費（渡航費及滞在費の一切）は遠征側の負担、開催側は試合会場の設定並大会の運営、及遠征側の宿舎から試合会場への輸送を受け持つ」という提案を何んとか韓国側に受け入れて貰はねばならない。この実現がなければ、今後、日韓学生交流は受け入れ側の経費負担が余りに多すぎて、交流を続ける事が不可能である。その上に立ってどの様な運営をしていくか具体的な運営方法を考える事とした。

(四) その他

① 本年7月4日〜8日イタリアで開催される第8回インテラムニアカップ（国際ユース大会）について前年日本協会より参加の可否について問合せあり、学連は、前回の会議でこの件を検討、出来れば男・女各1チーム参加させたい意向を日本協会に要請し、イタリアへ連絡をとっていたが、去る2月23日の日本協会全国理事会の折荒川日本協会理事長より中沢当連盟理事長に「インテラムニアカップは、日本協会ジュニア対策事業とすることに変更したい」との話があり、学連としては前回代表派遣を決めたものの、この件は白紙に戻す事とした。

② 本年6月にオーストリーのチームが来日するので出来たら学連チームも対戦したい（希望）。

③ 世界学生ハンドボール選手権について、去る2月29日の日本ユニバシアード委員会（ＪＵＳＢ）の折、フランスのユニバシアード委員会からの連絡として『本年暮から明年春にかけて（一九八〇年一二月二八日〜一九八一年一月一〇日）フランス国内各地で第8回世界学生ハンドボール選手権大会を開きたい。日本はこの開催時期についての可否及参加の可否について問い合せが来ているので、ハンドボールの学連の意向を至急返事が欲しい』旨が伝えられた。この件については、学連はすでに前回大会が中止となった際、今後開かれる世界学生選手権は全て参加したいと決めており、前回中止となった時の役員スタッフはそのまま持続次回参加へ継なぐ事を決めていることを再確認した。そしてこのスタッフを中心とし、時期的に余ゆうがないため、この大会は開かれるものと考えて早速参加準備に入り選手選考等にかかる事とした。

なお、日本ユニバシアード委員会には大会時期及大会参加両方ともいずれも「可」と返事をすると共に、日本協会にもこの大会参加について連絡し協力と援助を要請する事とした。

(五) 54年度全日本学連決算及55年度予算について

54年度の決算の結果、諸物価の値上りや、日本協会財団化についての基金分担等から、約二〇万円程の未払金（赤字）が出る結果となった。ついて55年度は交通費、通信費等全般に物価のはね上りも予想しなければならないとすると55年度の学連運営は予算上非常に苦境に立ち、54年度赤字分をもふまえて、学連加盟登録金の値上げをしなければならない状態になった。種々意見が出され、結果54年度決算及55年度加盟登録金の値上げ両件共了承、承認された。

(六) 55年度全日本学連役員改選について

(1)内海倫全日本学連会長が明年度も推薦され満場一致で留任決定した。

(2)会長推薦役員については今後の学連運営を考慮し、次回会議迄にお願いする方にご連絡し委嘱したいと会長より発言がありこれを了承した。

＜編集部・注＞世界学生選手権は、ＦＩＳＵ（国際学生スポーツ連合）の認定によって4年に1回〜最近は2年に1回〜開かれるもので、七九年（昭54）に予定された大会は、開催地問題がこじれ流会になっていた。日本は、これまで六三、七五、七七年の三回参加。

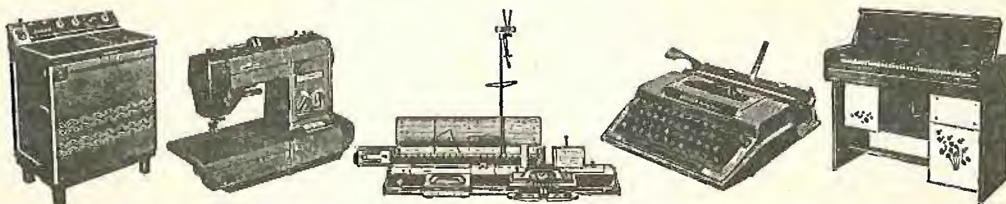


練習が技術をつちかい
技術が信頼を支える

きょうの反省を、あすの練習に、試合に結びつける……スポーツマンにとって、大切な心がまえです。常により高度な技術をめざしてチャレンジする——それはブラザーが目ざしているものと一致します。技術がチームメートの信頼を支えるように、お客さまの信頼に応えるのは、高度な技術に支えられた品質以外にないのですから——。

BROTHER
ブラザー

ブラザー工業株式会社
ブラザーミシン販売株式会社



日本協会専門委員会だより

総　務

◇**北朝鮮遠征へ**　朝鮮民主々義人民共和国（北朝鮮）から、初の招へい状が、日本協会へ届けられたが（＝本誌既報）、その後、日本協会は、この招へいを受け、男子ナショナルチームを派遣することになった。

いまのところ、遠征期は10月上旬の予定。

北朝鮮は、IHF、AHFの加盟国だが、これまでいちども国際舞台に登場したというニュースはなく、今回の招へいはベールに包まれた同国の本格的な〝国際進出〟として、内外の期待が大きい。

◇**サウジアラビアが来日**　サウジアラビア協会は、6月20日から7月12日にかけて、自費での合宿をかねて来日を希望。

日本協会は、2月の定例常務理事会で、全面的に受け入れ、対戦チームを募集することにした。また、サウジアラビア来日期間が、全日本男子オリンピック壮行試合日（6月21日）と一致するので、壮行試合として、全日本×サウジアラビアの実現に検討を加えることになった。本誌〆切りまでに全栃木（栃の葉ク）、本田技研鈴鹿らがサウジアラビアとの対戦を希望している。

◇**林記念賞について**　日本協会副会長・林達夫氏から永く残る記念賞のために、三百万円を日本協会に寄付の申し出があった。日本協会は林氏の申し出に対し、委員会を選出してその運用方法について協議することにした。

委員会は大野（総務）北川（企画）安藤（競技）大西（普及）の4名で構成される。

◇**イタリアのジュニアトーナメントへ参加**

イタリア・テラモ市の国際ハンドボールクラブが主催する「第8回インテラムニア・カップ」が、今夏7月4日から8日まで行われることになり、日本協会は、ジュニアの男女両チームを派遣する方向で、検討を進めることになった。

同カップは、ユース、ジュニアチームが、年令別の5クラスに分けられて争われる国際トーナメントで、これまでの7回は、ほんとど、各国の単独クラブが参加している。

日本は、19・20才クラス（昭和34年以降生まれ）に参加の予定でレフェリー2名も滞同の計画だ。

台湾の少年チームが、このトーナメントで2連勝したことがある。

日本協会専門委員会だより

国際渉外

アジアハンドボール連盟（AHF）の第3回通常総会が、4月12・13日ホンコンで行われることになり、日本協会から、荒川清美理事長と大野金一総務担当常務理事が出席する。

AHF総会は、2年に1回開かれるもので、日本は、2年前バンコクでの第2回総会（荒川理事長）につづき2度目の出席となる。

今総会は、76年に設立されたAHFにとって、初の役員改選が行われるため、内外の注目を集めている。

規約では、AHFの役員（理事会構成）は、会長、副会長、理事長、会計担当理事、理事となっており、理事4名の選出が、焦点といえる。

日本は、第1回総会（76年・クウェート）に欠席したため、これまで、理事会メンバーからはずれているが、渡辺和美IHF理事がIHF・AHF間のコージネーター役を兼ねて、AHF理事をつとめてきた。

日本協会へ通知された総会の議題によれば、AHF理事選出後、そのなかからIHFへの派遣役員を選挙するとしており、その理事が、今夏7月モスクワでのIHF総会で、アジア選出理事となる。

このほか、今回の総会では、82年インドで行われる第9回アジア競技大会への参加問題と、第3回アジア選手権の開催地問題に関心が集ろう。

アジア競技大会への参加は、74年、AGF（アジア競技連盟）憲章にハンドボールが加えられたことから、日本はじめ各国の要望が強まっている。

いまのところ、次回開催地インドでのハンドボール普及度が未だなしのことから、楽観を許せぬ状態だ。

第3回アジア選手権は、第1回（77年）クウェート、第2回（79年）中国南京市のあとをうけて開かれるもので、会期は、来年ということになる。

インドが立候補しているとも伝えられるが、正確な情報は入っていない。

開催地が宙に浮くようだと、日本への働きかけが強まることも考えられる。

アジアハンドボール界の近年の充実は、目ざましく、日本協会はAHFと密接な関連を保っていく方針で、すでに理事として、荒川理事長の立候補を、事務当局に伝えた。

プレス・ルーム ＜23＞

杉　山　　茂
――（ＮＨＫ運動部）―

■焦るな＜アジアのリーダー＞

日本協会は、新年度の重点施策の一つに、「アジアでのリーダーシップ」をあげている。

僕の知るかぎり、このスローガンは初めてのこと。

これまでは、国内の土台づくりに追われ、とても、国際的な仕事まで手を廻せなかったのが実情。

それだけに、このような大きな目標を掲げたのは、国内の地固めに対する自信があってのことと、評価したいし、このさきの展開に期待もかけたいが、アジアといっても、つい五、六年前とは、事情があまりにも異る。

ＩＨＦ(国際ハンドボール連盟)加盟国だけでも16、仮・未加盟国を加えれば20を越す大世帯。

しかも、ＡＨＦ（アジアハンドボール連盟）は、すでにクウェートの精力的な動きで、その活動が軌道へ乗りつつあるだけに、日本が、このあと、どう絡(から)み込んでいくか、かなり難問もありそうだ。

そんな折、ちょっと不安になる話を耳にした。

日本協会が、荒川清美氏（理事長）を、ＡＨＦ理事に推せんしたうえ、一気に、ＩＨＦのアジア代表理事として送りこもう、としているというのだ。

ＡＨＦ理事の座は、日本が、ＡＨＦへの加盟遅れから、第一期（一九七六〜七九年）には、とても望めなかったが、新任期である今年度からは、日本へ廻ってくる可能性が、強い。

それだけに、日本協会が、早手廻しに、荒川氏をノミネートしたのは肯定されるが、ＩＨＦ理事もというのは、引っかかる。

ＩＨＦのアジア代表理事は、一九七二年以降、渡辺和美氏（日本協会顧問、東京協会々長）が、二期にわたってつとめ、今夏8月モスクワでのＩＨＦ総会で、三選が有力である。

それを押しのけて、同じ日本から候補者を出そうとするのは、解せない話だ。

ごく最近、極めて確度の高い消息筋から、この日本協会の動きにＡＨＦが困惑しているという情報を、僕は得ている。

また、日本協会が、渡辺氏と荒川氏の〝交替〟の意向を、渡辺氏にまったく伝えていないといわれるのも、事実なら不明朗だ。（ＩＨＦから絶大な信頼をうける渡辺氏が、簡単に承諾するハズもないが…）

日本協会は、渡辺氏の＜資格＞を問題にしているようだが、同氏が、ＩＨＦ理事に推せんされた七二年の総会は、日本協会の公式代表で出席していたものだし、当時副会長の同氏を、国際的中立性を強めるためとして、わざわざ顧問に据えなおしたのも、日本協会自身なのである。

第一、顧問という役職は、立派な日本協会メンバーだ。

財政と人事はガラス張りをモットーにしてきた日本協会が、ここへ来て、「アジアのリーダー」を望むがあまり、功を焦り、強引な手段をとるようだと、モノ笑いにこそなれ、いい結果は望めず、第一歩ともいうべき＜ＡＨＦ理事＞のポストさえ、失うことになりかねない。時間をかけて渡辺氏とじっくり話し合って欲しい。

■十割回収できぬアンケート

本誌前号の国体ローテーションに関する記事を読んで、おやまあと思うことがあった。

この問題のアンケートに回答して来た協会が七割強（34都道府県協会）にすぎなかった点だ。

国体のローテーションは、僕の聞くかぎり、現在、地方協会の最大関心事の一つであった。

にもかかわらず、いざ、日本協会から、意見を求められると、13もの地方協会が、ダンマリをきめこむのは、どういうわけか。

僕が、日本協会の体制内に入って、運営のお手伝いをしていた頃も、いくどか、アンケートという手段で〝地方の声〟を集めようとした。

そのたびに、がっかりさせられたのは、回答の100%回収が、できなかったことだ。

回答を催促すると「重大課題をアンケートで意見集約するとはなにごとだ」という地方もあった。

「結構です。その旨書いて、評議員会（現在の代議員会）を臨時招集せよ、というのを貴県の回答として、ともかく用紙を返送して下さい」と、僕も、突っ張ったことが、何回かある。

それでも、100%には、いちどもならなかったのだ。

日本協会の中央スタッフは、どんな施策でも、地方(つまり組織)が、どう考えているか、反応するかに、神経をとがらせている。

といって、年に何回も何回も、全国会議を開くわけにはいかず、時には、アンケートという方法を採らざるを得ない。

県内の意見調整に手間どるなら少々の遅延提出も、中央は、目をつぶるハズである。

今回のように、全国会議を前に参考データとしてのアンケートでさえ、こんな低率の回収というのは、アンケートという形式そのものを、全面否定している地方（組織）が、多いということなのだろうか。

それならそれで一つの見識だが、それほどハイレベルでの無回答ではなさそうなところが、どうにも気がかりである。

日本実業団ジュニア負け越す

第8回日韓女子社会人交流試合

第8回日韓女子社会人交流は、2月7日から全日本実業団ジュニアが遠征して5試合、台湾でのオリンピックアジア予選で日本に快勝し、モスクワ行きを目前にしている韓国勢が3勝2敗で勝ち越した。

これで8回の通算成績は、日本側の38戦22勝1分15敗となった。

日本チームは、高校生中心の対ジュニア選抜戦と全北農組戦にかろうじて勝ったものの、昨年韓国チャンピオンの仁川市庁・ナショナル選手7名を擁する造幣公社及び光州市庁戦では完敗を喫した。

韓国では20年来の寒波に見舞われ、遠征後半の過労ピーク時に3連戦と悪条件下での対戦であったが、今後の日本チームの明暗を予想させる対戦結果となった。

▽第1戦

仁川市庁 20（12—9、10—8）17 日本

気温マイナス15度Cと言う寒さで、ベンチにストーブを置き、11くら走っても暖まらないような条件の中での一戦となった。日本は立ち上り良好で、サイド・ペナルティ・速攻などにより得点したがナショナル選手№10金王花がサイドを皮切りに№4季南子のロングシュートなどにより6連続得点し韓国が勝負を決定づけたかにみえた。しかし日本も鈴木・西らがサイドシュートやロングシュートで追撃し、前半を2点差とした。後半の立ち上り韓国は№10・№4の男子選手並のボールコントロールとシュート力により、アッという間に5得点された。前半の終盤息を吹き返しかけた日本チームを一蹴りされた感じで、試合は決定してしまった。

№10のサイドでの鋭い切り込みからの滞空時間の長いジャンプシュートやディフェンスを引きつけてからのパスワークは素晴らしいものがあった。また№4季南子はコントロールされたロングシュートとディフェンスに対応したクイックでのステップシュート等、そのシュート力は素晴らしいものだった。

きびしい条件下の試合ではあったが、ミスの少ない内容のある試合だった。

今後の試合もこのペースを持続してゆきたい。

▽第2戦

日本 22（14—9、8—12）21 韓国ジュニア代表

韓国ジュニアチームは、ナショナル選手1名を含む高校生中心のチームであり、スピードはないが思いきりのよい動きとパスで、ポスト攻撃を多く使用していた。

フローター№7・8・11等がシュートモーションにより2人のディフェンスを引きつけ、ポストに強引なパスを通していた。

前半は殆んどこのパターンで韓国に得点を重ねられた。

後半に入り、日本はディフェンスのコンビネーションも良くなり則武のロングシュートが決まりペースをつかんだ。終了間際に速攻でリードを奪い、ようやくの思いで勝つことができた。日本チームのミスが目立ち、相手チームのペースに入ってしまった為、苦戦しての1勝となった。

▽第3戦

造幣公社 32（19—10、13—6）16 日本

ナショナルプレーヤー7名を含む韓国最強チームとの対戦となった。立ち上りから鋭いカットインサイドシュート、№6李仁淑のポストシュートなどで一瞬の間に9連続得点され、韓国の一方的なゲームとなってしまった。

韓国は日本のミスに乗じ、素早い速攻からポスト・サイドへと多採な攻撃で加点していった。

日本も相手のメンバーチェンジと同時に速攻などで5連続得点を

第1戦

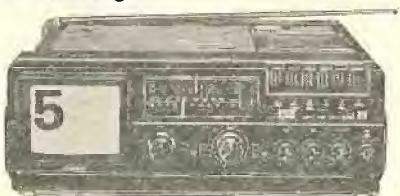
得	【仁川】		【日本】	得
0	崔恵京	GK	山　本	0
0	安美玉		寺　沢	0
1	鄭述礼	FP	佐久間	0
2	張玉紛		若　田	1
6	李南子		則　武	0
1	朴京花		植　田	3
2	朴玉景		大　輪	0
2	張泉先		西	5
1	尹英淑		陽　田	1
1	洪聖姫		八　木	4
4	金玉花		米　山	0
2	金貞愛		鈴木千	0
0	鄭貴玉		鈴木久	2
0	趙徳伊		石　田	1
0	成和淑			
22	(2)	PT	(5)	17

第2戦

得	【日本】		【ジュニ】	得
0	山　本	GK	金美玉	0
0	寺　沢		季慶任	0
0	佐久間	FP	金美煥	0
4	若　田		梁仁順	0
5	則　武		琴英善	8
2	植　田		韓相美	0
0	大　輪		季鐘禮	0
7	西		禹英淑	3
1	陽　田		金貞賢	5
1	八　木		田蘭淑	2
0	米　山		安春仙	0
0	鈴木千		金美淑	3
2	鈴木久			
0	石　田			
22	(5)	PT	(3)	21

第3戦

得	【造幣】		【日本】	得
0	金暎淑	GK	山　本	0
0	張世天		寺　沢	0
0	金基淑		佐久間	0
6	李明淑	FP	若　田	3
3	金順淑		則　武	4
4	李京姫		植　田	1
2	金先玉		大　輪	0
10	李仁淑		西	4
2	李相玉		陽　田	0
0	金美煥		八　木	2
5	任昌淑		米　山	0
0	權蓮花		鈴木千	0
0	成順熙		鈴木久	2
0	李玉華		石　田	0
32	(4)	PT	(2)	16



あげた。しかし韓国は、№4李京姫(左)のロングシュートをきっかけに、再びペースを取りもどした。

後半に入り甘いシュートを日本が放つたびに韓国は速攻を繰り返し、加点していった。韓国はディフェンスとキーパーのコンビネーションがよくとれていて、シュートコースを総て読まれているようであった。また日本のシューターが無理な体勢からシュートを放つ為、完全に振り切れない中途半端なシュートになっていた。

日本チームに対して、韓国は自信あふれるプレーを見せつけた。

▽第4戦

日　本 15（7－10 / 8－4）14 全北農組

疲れの為か日本チームのミスが目立った。得点につながる大事な場面で初歩的なミスが出て、なかなか調子に乗れなかった。日本はポストからのペナルティを連続して取られ、前半はリードされた。

後半立ち上りサイドとロングシュートで2点先取した日本は、本来の調子をとりもどし、活気がでてきた。2点差・1点差の攻撃が続き、西・八木の連続得点により一時は逆転した。しかし韓国も速攻で同点とし、このまま終了かと思えた。試合終了間際、西のロングシュートが決まり、まして も劇的な逆転勝ちとなった。

かろうじて得た2勝目だが、前半のミスがなければ楽勝できたと思う。

▽第5戦

光州市庁 20（11－6 / 9－9）15 日　本

最終戦のためか日本チームは、今までになく元気で、スピードあふれる好調な立ち上りを見せた。10分間位は一進一退のゲームであったが、ポストで納得できないペナルティをとられ、その後6連続得点を許してしまった。日本はこの劣勢を立て直すべく、速攻からペナルティを得るなどして韓国の連続得点だけは止めていた。

前半の5点差のハンディを負った日本は、後半に入り2点差まで詰め寄ったが、またしても納得いかない笛にペースを乱されてしまった。ベンチ及び選手も予測はしていたものの納得できない展開となった。

満員の観衆で盛り上ったが、後味の悪いゲームであった。

▽総　括

韓国選手は、どのゲームに於いても松樹脂を使用し、完全にボールを持って失敗を恐れず、のびのびとしたプレーをしていた。それが国民性によるものなのか、指導法か、自信からくるものなのかは分らないが、実に明るく好感の持てるプレーだった。

日本選手も、自分の持っている力を充分に発揮し、納得の出来る遠征であったと思う。この経験を多いに生かし、今後の打倒韓国の執念に燃やしてくれることを希望するものである。

緒方　嗣雄（遠征選手団コーチ）

第 4 戦

得	【日本】		【北農】	得
0	山　本	GK	洪昇福	0
0	寺　沢	GK	姜奉淑	0
0	佐久間	GK	金徳順	0
1	若　田	FP	李基子	2
3	則　武	FP	金敬淑	5
0	植　田	FP	李美順	0
0	大　輪	FP	魯良姫	0
5	西	FP	裴明子	6
1	陽　田	FP	鄭熙英	0
5	八　木	FP	金南淑	0
0	米　山	FP	趙珉子	1
0	鈴木千	FP		
0	鈴木久	FP		
0	石　田	FP		
15	（3）	PT	（6）	14

第 5 戦

得	【光州】		【日本】	得
0	申淑賢	GK	山　本	0
0	丁順福	GK	寺　沢	0
0	憲恵淑	GK	佐久間	0
0	盧慶姫	FP	若　田	3
2	鄭滋敬	FP	則　武	2
9	李京淑	FP	植　田	2
4	徐美子	FP	大　輪	0
1	姜京心	FP	西	3
0	金多順	FP	陽　田	2
0	尹今玉	FP	八　木	2
0	李定蘭	FP	米　山	0
4	金正富	FP	鈴木千	0
		FP	鈴木久	1
		FP	石　田	0
20	（6）	PT	（1）	15

日韓社会人女子交流試合より

写真提供　谷口氏



オリンピックアジア予選リポート

新井　節男

日本協会トレーニングドクター群は従来のスタッフの業績をふまえた上に更に新しい型のものを導入し、ナショナルチーム強化のために役立つことを念頭におき、種々の試みをなして参りました。

これらの試みが如何なる成果として表出したかを自己評価すること。そしてアジア諸国がいかなるトレーニング法を用いているかをゲームを通じて洞察するため、昨春11月台湾でアジのア予選に出張致しましたので報告致します。

◇

結論から先に述べるとドクター群の意図が男女チームともに充分に浸透しえていなかったということである。

このことはドクター群発足当初におけるナショナルチーム責任者（監督・コーチ）との意見の相違にもみられる様にその機構的存在理由の不明確さならびに新しい体制設置時に何処においてもみられる不調和に原因するものと考えられる。

しかし、トレーニングドクター群の意図はナショナルチーム責任者に早い機会に理解し得ていただけたため、事はスムーズに運びはじめた。ところが、選手の側がやはり新しいシステムにとまどう事になり、充分な効果を生じなかった理由をつくってしまった。

そのことはドクター群の提出したトレーニング処方PARTⅠ・Ⅱが手もとに届く手続き上のミスと選手個々人の理解度・努力度に原因がもとめられる。

さらにドクター群提出のトレーニング処方PARTⅠ・Ⅱが理解しやすいものにしようとした配慮の結果、体力レベルアップ処方としてやや生温い内容となっていたことは否めない事実であり、我々の反省の糧と考えている。

ただ、選手個々人のパワー、敏捷性、巧緻性において若干の改良点がみられたものと信じている。

今後はチーム責任者を仲介点としてドクター群と選手個々人の連携を密にし、ロス時間の短縮化を計る方策を立てることに重点をおくべきであることを痛愛している台湾、韓国のトレーニング法について次に記しておこう。

台湾ナショナルチームのトレーニングについては、その指導者に日本チームより招聘されるという事柄より考慮外と考える。ただしバスケットボール競技出身者が多いという点から高さへのトレーニングに特別なものがありそうである。

韓国ナショナルチームのトレーニング処方などはゲームをみるだけでは特別なものは感じられないしかし、柔軟さを失なわないウエイトトレーニングをつんでいることは確かであろう。さらにラインクロスなどのイージーミスに対してはコーチだけでなく、チームメイトなどからきびしく非難されていることから練習中における態度が想像される。

女子チームの長いラテラルパス確実なブロック、カットイン、ホールディングを振り切るパワー、決してボールを恐がらないキーパーの姿勢などは、日本ハンドボール界から学び、それを一層みがき上げたものと解される。

この点に関しては日本（名古屋・東京）において中国ナショナルチームがバスケットボール出身者にヨーロッパスタイルのスローイングを身につけさせているのとは別個のものと考えられる。

しかし、共通してみられることは高さへの挑戦というか、高身長者を集めると同時に滞空時間の延長、滞空時の姿勢制御という点に多大の配慮力点をおいているということであろう。（筆者は日本協会強化部トレーニングドクター群メンバー）

ＩＨＦ、アジア予選を講評

ＩＨＦ（国際ハンドボール連盟）から、このほど日本協会へ届けられた広報は、昨秋のモスクワ・オリンピックアジア予選～第1次予選～についての講評をかかげた。

◇

一九七九年十一月十七日から二十三日まで台湾で、アジア大陸の男、女予選大会が開かれ、盛況のうちに、12試合が行われた。

これらの試合の中で、特に女子の日本×韓国の試合はその速いテンポと緊張した時間の故に特に目立った。

2年前、韓国女子は決勝で日本女子をノックアウトすることに成功した。今回その実力左はより大きくなっているように見えた。それは主として、韓国が前回世界選手権大会出場経験の後、国際経験を豊富にしたからだと思われる。韓国女子は第一回戦を17対15で勝った後、日本を圧倒した。日本は体格上の不利もあり、第二回戦では前半6対1、後半12対3と明白なリードを許してしまった。

この韓国の成長は日本の男子チームにとっても大きな警告のように見えた。日本は第一回戦では25対16と大きくリードをしたが、第2回戦ではこの情勢は大きく変化し、かろうじて26対24でリードできた。

その原因は185㎝以上の身長の選手を5人も有する韓国はふんだんに選手交代ができたからである。

第2回戦では、日本は前半14対12でリードしていたが、津川、穂積、大原らの個人技にたよりすぎていたように思われる。

しかしながらこの対戦は十分観戦するに値する好試合であったと言える。

再度ふれることになるが、台湾ハンドボール協会の大会組織化は模範的であり、6日間にわたる大会に1万8千人の観衆が動員された。

なお、この大会のあと、男子の日本は、東京、名古屋で中国と対戦、二勝をあげて、モスクワ行きを決めた。

中国は、ＩＨＦ仮登録メンバーとして対戦したが、これは、ＩＯＣ（国際オリンピック委）が、中国を賛成多数でＩＯＣメンバーとしたことによるものである。

◇アジア予選（54年11月・台湾）日本の成績▽男子　日本30―15台湾、日本25―16韓国、日本29―18台湾、日本26―24韓国、▽女子　韓国17―15日本、日本41―9台湾　韓国22―14日本、日本28―15台湾

日本の変化攻撃賞讃 中国スポーツ誌

中国体育協会が発行している英字誌「チャイナ・スポーツ」2月号のトップ記事として「第二届並洲手球錦標賽（第二回アジアハンドボール選手権大会）に於る日本対チャイナ二回戦」としてラン・スイ氏の講評が掲載されていたので彼等が日本をどう見ているのか参考になるのでその訳を紹介します。（境井秀三）

☆ ☆

昨年十一月中国東部の南京市ウータイ山頂上にある角形室内体育館で行なわれた第二回アジアハンドボール選手権大会に於て、日本は中国を27対25で破った。大会には中国のほかインド、日本、クエート、パキスタンの男子チームが参加し各チームが四試合を行なった。

予想されたとおり、この大会の見せ場となった対決はチャンピオンの座を防衛しようとする日本と前回アジア選手権大会に出場した選手9人を含み最近の第四回国内大会結果から選ばれたベストプレヤーを誇る中国との間の対戦であった。

中国チームは相手チームのキーポイントとなる選手をくぎ付けにする技法を採用する

一方、攻撃ペースを速くして日本が点対点で戦わねばならないようにした結果前半終了時には13対12でわづかのリードを取られた。後半では、日本チームはそのディフェンスを堅くするとともに、相手の攻撃でのエラーを利用するという堅実なゲーム展開を見せ、結果的には2点のリードで試合に勝った。

日本の選手は中国の選手より背が低いにもかかわらず高度にフレキシブルな（変化の多い）試合展開を見せた。彼等のロングシューター蒲生は密接してマークされていたが、彼等はその得意とする十文字のスクリーンプレーを用い早いランニングパスで守備陣に入り込むことを可能にした。彼等の賢明なチームワークと色々に変化するシュート方法は彼等を特徴づけ、良い結果に終った。中国チームは、これまで攻撃に重点を置き、防ぎょをおろそかにしがちであったが、その防ぎょ能力を改善するとともに、長距離のジャンプシュートを打つという身長の高い利点をフルに活用した。リ・タイピンとチエンジジュンはフリスローラインの外側からのジャンプシュートやディフェンスの頭上を抜くシュートにより、多くの輝やかしい得点をした。

韓国女子「モスクワ」へ

モスクワ・オリンピック女子の「3大陸代表決定戦」は、3月15日から21日まで、コンゴのブラザビル・スタジアムに特設された屋外コートに、韓国（アジア代表）、アメリカ（米大陸代表）、コンゴ（アフリカ代表）の4カ国が集まり、2回総当り制で行われた。

その結果、昨秋のアジア予選で日本を破り代表権を手にした韓国が、この大会でもスピードにあふれた攻守で、アメリカ、コンゴをゆさぶり、みごとに4戦全勝、宿願のオリンピック出場権獲得に成功した。

一九四六（昭21）年創立といわれる韓国協会の球史で、オリンピック参加は、男女を通じて、今回が初めて。

韓国のメンバーは、173cmのアタッカー、李仁淑をはじめ李相玉、李京姫、GK丁順福ら、アジア予選とほとんど変わりはなかった。

なお、ロスアンゼルス・オリンピック前の「3大陸代表」決定戦開催地は、アジア大陸代表国で行われることが内定した。

韓国	24	13－12	11－8	20	アメリカ
コンゴ	22	13－9	9－2	16	アメリカ
韓国	24	14－6	10－5	11	コンゴ
韓国	14	8－5	6－4	9	アメリカ
コンゴ	13	－	－	9	アメリカ
韓国	23	7－7	16－8	15	コンゴ

【順位】①韓国4戦全勝②コンゴ2勝2敗③アメリカ4敗

米大陸男子はキューバ

モスクワ・オリンピック男子の「アメリカ大陸代表決定戦」は、第1回パンアメリカン選手権を兼ねて、1月7日から13日まで、メキシコシティに、6カ国を集めてリーグ戦で行われた。

その結果、本格的な国際トーナメントに初めて登場したキューバが、〝先進国〟のアメリカ、カナダらを破り、みごとにモスクワ行きの栄光を射止めた。

キューバは、緒戦、若い選手を揃えたブラジルに引き分け、苦しいスタートだったが、第2戦、優勝候補のカナダに逆転勝ちしてから波にのり、これまでベールの向う側で、ソ連、東ドイツらの指導をうけていた力を発揮、アメリカ戦もせり勝ち、センセーショナルなデビューを飾った。

アメリカは、カナダにも敗れ3位、一九三六年のベルリン・オリンピック（11人制）以来、4回連続オリンピック出場の夢を絶たれた。

なお、女子予選のアメリカ×カナダ（2試合）は、カナダが棄権アメリカが「3大陸代表」決定戦（前掲）へ出場することになった。

カナダ	22	11－13	11－9	22	メキシコ
キューバ	19	11－7	8－12	19	ブラジル
アメリカ	19	9－7	10－5	12	アルゼンチン
アメリカ	27	13－13	14－10	23	ブラジル
アルゼンチン	19	10－6	9－9	15	メキシコ
キューバ	22	14－10	8－9	19	カナダ
カナダ	18	12－8	6－5	13	アルゼンチン
ブラジル	14	9－9	5－4	13	メキシコ
キューバ	23	11－11	12－9	20	アメリカ
キューバ	29	12－10	17－7	17	アルゼンチン
カナダ	19	10－7	9－9	16	ブラジル
アメリカ	32	19－10	13－7	17	メキシコ
カナダ	20	10－7	10－10	17	アメリカ
ブラジル	18	12－9	6－5	14	アルゼンチン
キューバ	28	14－10	14－12	22	メキシコ

【順位】①キューバ3勝1分②カナダ2勝1分1敗③アメリカ3勝2敗④ブラジル2勝1分2敗⑤アルゼンチン1勝4敗⑥メキシコ1分4敗

昭和53～54年度
公認スポーツ指導者ハンドボール上級コーチ講習会
—報告・日本協会普及部—

日本体育協会が「公認スポーツ指導者制度」を昭和52年度より発足させたわけであるが、日本ハンドボール協会もその制度にのっとり、「公認スポーツ指導者ハンドボール競技上級コーチ講習会」を昨年の二月末日から三月初旬にかけて開催したことは周知の通りである。この「上級コーチ」は、日本体育協会と日本ハンドボール協会が共同して養成し公認するものであるが、その養成過程は、共通教科(日本体協が行なう)と専門教科(日本ハンドボール協会が行なう)に分かれている。今回の講習会で専門教科を修了したものは48名である。この指導者制度は後述するように全国的な組織を持つ制度であるが、公認されたハンドボール指導者を日本ハンドボール協会内でどのように置置づけるかについては普及部でも対策だけでまだ結論を出すに至っていない。この制度が、協会内でうまく位置づき機能していけば、ハンドボール発展に大きく寄与していくことは間違いのないことであろうと思われる。この制度については、54年度より技術委員会より普及部に担当換えになっている。普及部としては中学問題、クラブ問題その他種々の重要なテーマをかかえているが、公認指導者制度も普及施策の重要な問題として対処していかなければならない問題である。

このような公認の制度に日本ハンドボール協会が取り組んだのははじめてのことではない。昭和四十二年九月に三日間の期日で、「ハンドボール公認コーチ講習会」を開催している。各ブロックより選ばれた30名が受講者となり、「運動の生理」等の講義と「実技」を行ない多大な効果をおさめている。この講習会は翌年も行なわれたが全日本教職員大会の一日をこれに当て、縮少した形で行われた。機関誌の報告では、その後この制度の記事はないので、二年間で終止符がうたれたようである。ただ公認の制度は消えても研修の制度は教職員大会時に生かされ、二年後の昭和年より「ハンドボール研修会」の一名のもとに現在まで続いている。

「スポーツ指導者制度」は、日本体育協会のもとに、すべての加盟競技団体と加盟地方団体が一致してなされるものであり非常に大きな規模をもつものであるので、この制度を熟知しておかないと協会内にこの制度をとり入れることが困難である。

◇

昭和53～54年度スポーツ指導者ハンドボール競技講習会を修了された方へのお願い。

現在、共通教科・専門教科を修了されている人は、48名のうち36名です。そのうち登録されている人は23名です。共通教科を修了されていない12名のうち9名は今年度の通信教育によって修了することになっていますが、3名の方は共通教科を受講されていません。36名の修了者のうち13名は未登録ですので登録されるようお願い申し上げます。

（お詫び）当記事は、昨秋、すでに日本協会普及部から寄稿されていましたが、編集上の手ちがいから掲載が遅れました。

（財）日本体育協会公認
スポーツ指導者制度

国民スポーツ振興と競技力向上にあたる「スポーツ指導者」の資質と指導力の向上をはかり、指導活動の促進と指導体制を確立するため、本会は加盟競技団体ならびに加盟地方団体と一致して「(財)日本体育協会公認スポーツ指導者制度」を制定する。

一、目的

本制度は次の事項の実現をはかることを目的とする。

1　各スポーツの特性に対応した指導体制を確立する。

2　多様なスポーツ活動に対応した指導者を、一貫した育成システムによりその資質と指導力の向上をはかる。

3　指導者の各組織内における位置づけと、指導技能や指導能力に応じた資格認定を明確にし、社会的信頼を確保する。

4　競技別および地域別に指導者の組織的連係をすすめ活動促進をはかる。

5　現行のスポーツ指導者育成事業は発展的に本制度に組み入れ計画的に育成をはかる。

二、指導者の種類と役割

本会が育成し、公認するスポーツ指導者は次の分類による。

1　スポーツ指導員（Instructor）

主として地域におけるスポーツ活動を実践しているグループやクラブを対象に、導入的、基礎的なスポーツ技術の指導や、一般的な身体活動の指導を行ない、かつ活動組織の育成・指導にあたる者。

指導対象者の性、年令、経験運動能力に対応する基礎的な知識と指導技能を身につけ、一応の指導経験を有する者。

2　コーチ

①コーチ（Coacn）

スポーツ活動を実践しているグループやクラブを対象に、スポーツ技術の専門的指導と活動組織の育成、指導にあたる者。

指導対象者の性、年令、経験運動能力に対応する専門的な知識と指導技能を身につけ、相当な指導経験を有する者。

②上級コーチ（Senior coach）

スポーツ活動を実践しているグループやクラブを対象に、スポーツ技術の専門的指導とスポーツ指導員等の育成指導にあたるとともに、新たな技術の研究開発や高度な技術指導をも行ない得る者。

指導対象者の性、年令、経験運動能力および当該スポーツの特性に対応する専門的な知識と高度な指導技能を身につけ、相当な競技経験と指導経験を有する者。

3　トレーナー（Trainer）

身体活動およびスポーツ活動を実践している人の体力トレーニング、コンディショニングを専門に指導する者。

指導対象者の性、年令、経験

運動能力に対応するトレーニング法の理論と実践、救急法、テ ィビングマッサージ、健康管理などの知識と技能を身につけ指導経験を有する者。

三、指導者の育成

前項のスポーツ指導者の資質と指導力の向上をはかるため、次の育成コースを設け育成講習を実施し、その修了者に資格認定を行なう。

1 スポーツ指導員育成コース（都道府県講習会）

都道府県体育協会と都道府県競技団体が一致して講習会を実施する。

2 コーチ育成コース（中央講習会）

① コーチ育成コース。

② 上級コーチ育成コース。

両コースとも、本会と競技団体が一致して講習会を実施する。

3 トレーナー育成コース（ブロック・中央講習会）

本会が実施する。

前記の各育成コースは、別に定める教科項目を基準に共通教科と専門教科から編成され、各教科とも単位性とし段階を追って履修できる。

四、指導者の登録

前項で育成された「スポーツ指導者」は、組織的指導体制を整備するため、別に定める登録規定により本会ならびに加盟団体へ登録を行なう。

五、指導者の組織と活動

公認スポーツ指導者が所属するグループ、クラブ、団体など、組織の育成や活動を促進するためスポーツ指導者協議会を組織する。

1 組織の原則

本会が認定し、登録したすべての指導者による自主的な、指導者自身の組織とする。

2 組織の形態

① スポーツクラブ指導者連絡会議

各活動単位としてのスポーツ組織に所属する指導者が、施設の共用などを基盤に参画範囲を定めて連絡会議を構成し、当該スポーツ組織の活動を促進するため連絡協調をはかる。

② 市区町村スポーツ指導者協議会

各スポーツ組織で活動する各種指導者により協議会を組織し、地域内の指導者の連係と指導者バンクの設置などにより、地域住民の要請に応える体勢を整備する。

③ 都道府県スポーツ指導者協議会

各市区町村スポーツ指導者協議会の代表と競技別指導者の代表により協議会を組織し地域の特性に即した指導活動の方策を協議し、その促進をはかるとともに、県内指導者の把握と指導者バンクを設置し、市区町村バンクの活動を援助する。

④ 競技別スポーツ指導者協議会

競技別スポーツ指導者の各都道府県協議会、および各都道府県協議会の代表により全国協議会を組織し、競技特性に即した技術の開発、研究、指導法の研究を行ない、競技別技能の向上をはかる方策を協議しその徹底につとめる。

⑤ 全国スポーツ指導者連絡会議

各都道府県スポーツ指導者協議会の代表と競技別スポーツ指導者協議会の代表により連絡会議を組織し、団体相互の連係を密にして、地域におけるスポーツ活動の振興と競技別技能の向上をはかる方策を協議し、その徹底につとめる。

3 組織の機能

各組織の役割の他に次の機能を備える。

① 指導者の資質向上をはかる研修会等を開催する。

② 各種情報交換や広報活動を行なう。

③ 指導者相互の連絡協調。

④ 本会ならびに関係団体への協力。

六、指導者の育成ならびに資格認定に関する暫定措置

本会が育成し資格認定した既存の有資格者については、今後の積極的な活用をはかるため新制度への移行の優先措置を講じる。また当分の間、3項で定めた資格認定に関して、当該競技団体との協議により必要な暫定措置を講じる。なお、上記移行措置および暫定措置は別に定める。

53年度上級コーチ講習会修了者名（48名・ABC順）

浅野　鉦世	（31才・東京）
阿部　徳之助	（42・栃木）
井　薫	（40・熊本）
池田　鉄哉	（34・茨城）
市原　則之	（37・広島）
伊藤　宏幸	（27・栃木）
稲垣　雅彦	（42・東京）
大西　武三	（33・茨城）
奥川　恵	（26・島根）
甲斐　忠義	（41・佐賀）
樫塚　正一	（33・兵庫）
梶岡　俊介	（31・三重）
川上　整司	（35・東京）
北井　晴次	（35・埼玉）
木野　実	（33・広島）
金城　幸信	（34・沖縄）
小山　哲央	（33・愛知）
斉藤　和夫	（46・茨城）
佐藤　喜一	（38・大分）
宍倉　保雄	（28・大阪）
設楽　孝治	（41・神奈川）
白神　邦雄	（32・愛知）
末次　功	（36・佐賀）
住森　憲治	（32・栃木）
竹野　奉昭	（43・埼玉）
谷口　俊郎	（30・埼玉）
谷藤　勝美	（31・岩手）
土井　秀和	（28・大阪）
富永　劭	（43・福島）
中井　公人	（36・奈良）
永井　忠昭	（36・岡山）
中所　和信	（37・山口）
華立　要	（38・福井）
東　嘉伸	（38・大阪）
水海　正行	（28・千葉）
平田　幸男	（49・広島）
藤原　侑	（37・東京）
本田　洋	（32・大阪）
真木　崇	（43・愛媛）
松浦　滋	（30・愛知）
松原　紀機	（36・鳥取）
水上　一	（32・茨城）
宮崎　光市	（41・北海道）
室川　正治	（33・北海道）
山口　毅	（36・東京）
山崎　武	（36・大阪）
吉田　元	（37・岐阜）
渡辺　慶寿	（43・栃木）

次回の受講者を受付中

日本協会は、第2回の「公認スポーツ指導者ハンドボール上級コーチ講習会」を、来春2月10日から15日まで東京・青少年総合センター（予定）で開くことになり、その受講生40名を募集している。

申しこみ〆切日は4月10日・日本協会必着。詳細は日本協会（03—467—7097）または、各都道府県協会に問い合せのこと。

ハンドボールテキスト

五段階指導法の紹介

日本ハンドボール協会編

このテサストは、教科体育のより良い指導を目差し、日本協会普及部が中心となり昭和53年に完成したものである。従来ハンドボールの指導は、競技活動を経験しない先生方にとって難がしい種目と受け取られがちであった。そこでだれにでも簡単に、しかも確実な成果をあげられる指導法をと考えられたのが五段階指導法である。

一、指導法の考え方

今日、ハンドボールに関する参考図書も多く見られるようになったが、内容は技術解説書であり、ハンドボール関係者を対象とした言わば仲間内だけの専門書がそのほとんどである。

それ故そこに示された指導法は課外活動（クラブ活動）のための指導法であり、そこで強調されるのは基本技術→応用技術→ゲームという流れであり、らしさの要求である。即ち、基本技術→応用技術がある程度マスター出来なければ〝ハンドボールらしいゲーム〟が出来ないとする考えのようである。しかしながら教科の短い時間内でのらしさの要求は、ハンドボール競技を経験しなかった先生方には大変困難なようである。むしろハンドボールを〝ゲーム教材〟としてとらえたほうが授業を展開しやすく、しかも生徒にとって楽しいハンドボールとなるはずである。しかし楽しいハンドボールゲームは応々にしてゲームを消化するだけの、楽しさだけの味付けに終ってしまう危険性を考慮すべきである。

今回のテキストは上記の事をふまえた上で、ゲームを展開したときの攻防パターンを五段階に分類した。これにより、生徒がどの程度の競技能力を有しているかを察知し、どのような練習内容を処分すべきかを判断するための基準となるようにした。

各段階でのゲーム様相の特徴は次に示したが、練習目標をより明確にするため、ゲーム内容を記録（テキストP68参照）し、分析すると良い。これにより指導者は各チームの能力（第何段階のゲーム様相を示しているか）と問題点を容易に見い出せる。又生徒自身もこのテキストを利用して練習計画をたてる事ができるので、グループ学習による積極的な授業を展開する事が出来ると確信します。

二、ゲーム様相の分類と指導体系

ゲーム様相とは、ゲームの状態あるいはゲームのありさまという事であろうが、低レベルのゲームからいわゆるゲームらしいゲームまでの間にある識別出来うるゲーム様相の段階が見られる。多くのデータから次頁のように五段階に分けることができる。

これまでの指導法（主として技術指導法）は、第3段階以降の〝もっともゲームらしい状態の中でのゲームのための技術指導〟であり、〝密集混乱の状態の中でのゲームのための技術指導〟ではなかったのではないかという事である。即ち、練習は第三段階以降の場面を想定して行なっているのに、実際のゲームは第一・第二段階であるという矛盾が表われてきたのではないのか。

この段階別指導法により、ゲームの中で生きたものとして技術を指導することが可能になる。

現場での指導展開においては、ゲーム様相を小学生レベルから大学生レベルまで同一のものとして促えるのは無理があるわけで、各レベル（小・中・高校・大学・性別）での五段階があると考えることによって、そのレベルでの目標が明らかになるものである。

三、テキスト使用方法解説

五段階指導法についてはある程度理解していただけたと思いますが、最初の時間からゲームを行なうのではなく、2時間程度はハンドボールの特性を良く理解させるように努めるとよい。その後テストマッチを行なわせ、ゲーム様相の特徴からそのチームのゲーム様相の段階を判断する。

初心者が多いクラスの場合、第一段階の密集型のゲーム様相を示す場合が多くパスミス・キャッチミスが多くみられる。

この第1段階のゲーム様相を示すゲーム展開がなされている場合得点力を向上させることに主眼を置き、その有効手段として速攻を中心に指導すると良い（指導内容は、テキストページ以降に示されている。）この第一段階では静止した状態でのパス・キャッチがやっと出来る程度の技術しか持たないので、速攻に必要な移動しながらのロングパスやキャッチの技術を修得させることがまず第一である。次に速攻でのパスキャッチが出来るようになると、助走スピードを感じずにキャッチからシュートが出来るように指導すると良い。

以上の技術がある程度修得できるとゲーム様相は第2段階の特徴を示す。

第2段階では速攻による得点が増加するので速攻に対する防御法を中心に指導する。対速攻技術がある程度できるようになると除々にゲーム様相は第3段階のものとなる。

第1・2段階では、特に味方やボールに対応した技術が要求されたが、第3段階に入ると防御者に対応した技術が要求される。

防御者のいない所へ移動したりカットインからシュートできる必要がある。防御者が複数になってくると1人での攻撃では不充分で他の味方プレーヤーと協力して攻撃する技術（攻撃ユニットプレー）が必要となる。このユニットプレーがある程度理解され、得点力が向上したなら、次に防御ユニットプレーを指導し、ユニット攻撃に対応できるようにする。

この防御ユニットプレーの練習により、ハンドボールでのゾーンディフェンスの有効性を理解させる。そして様相は第4段階の特徴を示すようになり、ユニットプレーを軸とした全員攻撃方法と指導を進めていく。

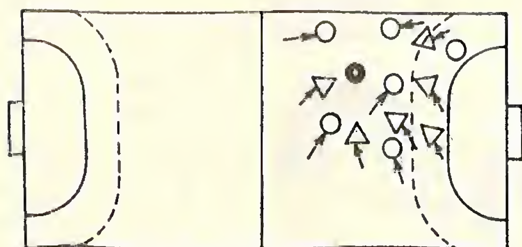
つまり、本指導法はゲームを通して段階的な技術を必要に応じて修得させるものである。

（平岡秀雄）

◇　◇　◇

試合様相の分類とその特徴

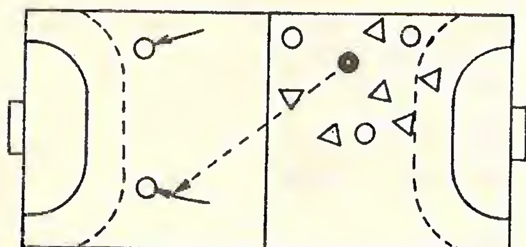
第１段階“密集型”“だんご”



特　　徴

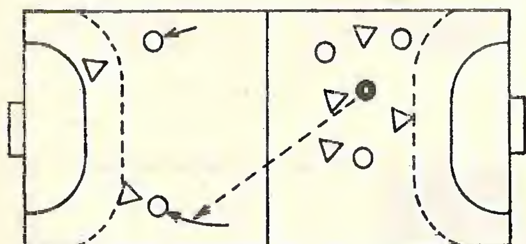
1. ボールを中心に攻撃と防御が入り乱れる。
2. 短かいパスが前後左右になされ，ボールはあまり前進しない。
3. ボール保持者のドリブルミス・パスミスが多い
4. シュートはまれで得点は少ない。

第２段階“飛び出し型”



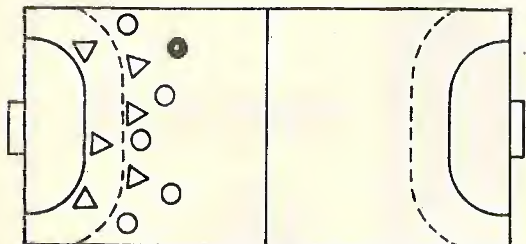
1. 密集から飛び出す者が現われ，ボールは前進するが，ロングパスのためパスミス・キャッチミスが多く見られる。
2. シュート数が増加し，得点も増す。
3. ２～３人のみが直接攻撃に参加している。

第３段階“半ゾーン型”



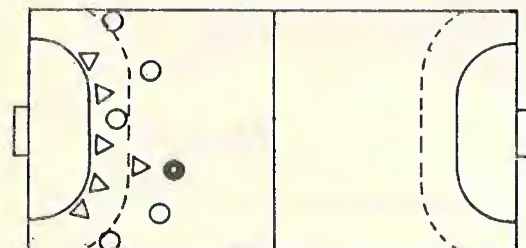
1. ボールに密集するグループと速攻に対応した防御グループ（ゾーン）に分れる。
2. 攻撃終了後直ちに自陣地にもどり，ゾーンディフェンスを行なう者があり，得点力は減少する
3. 攻撃地域（相手コート）へはスムーズにボールが進む。

第４段階“ゾーン型”



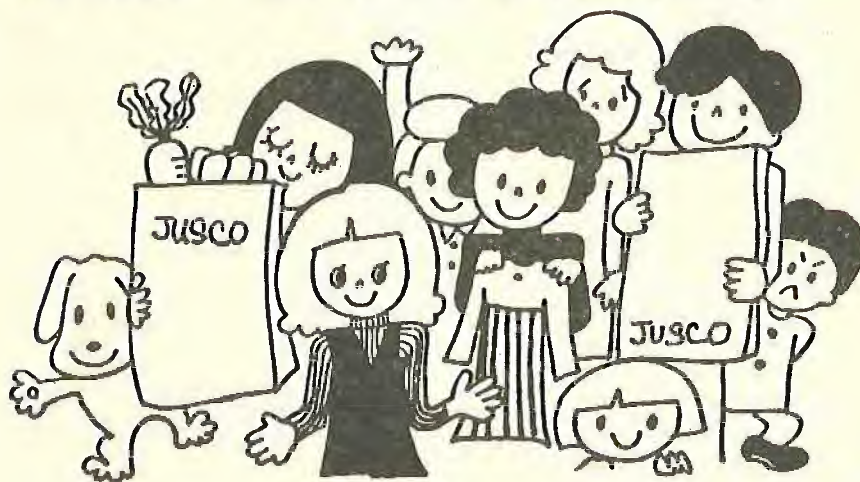
1，ディフェンスはゾーンで壁を作るがポジションは一定しない。
2. ２～３人が意識してユニットプレーを行っている。
3. 得点にしめる速攻の割合が高い。

第５段階



1. 全員が直接攻防に参加している。
2. ディフェンスは各自が自分の防御地域を役割分担して守れる。
3. セットオフェンス（遅攻）による得点が徐々に増加してくる。

暮らしへの奉仕を合言葉に。



ジャスコ

東京本社 東京都千代田区神田錦町1－1
大阪本社 大阪市福島区大開1－8－8



ハンドベアーの補強は4つの革と幾重にも縫いこまれたミシンステッチ。
ツマ先を守るフロントプロテクター、踵を守るリアプロテクター、左右を守るサイドプロテクター等、どのポジションの足にも耐えられるこれらの補強は、アッパーを守るだけでなく型くずれ防止にもなっています。そして、二重のスポンジクッションとフットワークのロスを解消するモールド底と共に軽快な足沿いを約束しハードな動きに対する足への保護はまさに万全です。

HAND BEAR

●サイズ/22.5～29 ●カラー/ブルー×白ライン ●¥3,500



BEAR

ベアー株式会社 神戸・東京

世界男子Cグループ

ノルウェーが初優勝

第3回世界選手権男子Cグループは、2月2日から9日まで、ファロー諸島のトスファフン市を主会場に10カ国が参加して開かれ、ノルウェーが初優勝を飾った。

大会は、参加国を2組に分け予選リーグ、そのあと各組同位チームで、順位決定戦を行った。

国際的なビッグイベントを初めて迎えた地元ファロー諸島をはじめ、イタリア、ベルギー、ポルトガルなどの進境が伝えられ、前回の勝者スイスが、一気にグループもかけ抜け、モスクワ・オリンピック出場権を獲得するという実績も刺激となって、熱戦がつづいたが、やはり、Bグループの経験をもつ国々が、試合運びで一日の長を示した。

A組では、ノルウェー、オーストリアの争いとなり、ノルウェーが逆転勝ち、B組はフランスが緒戦ベルギーにせり負ける波乱があったが、そのあとの試合でよく立ちなおり、イスラエルを得失点差でかわし一位となった。

ノルウェー×フランスの決勝は、フランスが、鋭い攻撃で一方的に試合を進め、後半2分12―6とダブルスコア、優勝を決めたかとみえた。

ところが、そのあとノルウェー捨て身の反撃にあって冷静さを失ない、わずか12分間で同点（13―13）にされてしまい、延長へもつれこみ、勢いにのったノルウェーが4―2のリードを奪って、驚異的な逆転優勝を遂げた。

3位オーストリア、4位イスラエルまでが、来年のBグループに進出する。

▽予選リーグA組

オーストリア 22―16 ルクセンブル

イタリア 24―23 ファロー諸島

オーストリア 27―18 ファロー諸島

ノルウェー 25―11 ルクセンブルグ

ノルウェー 26―13 イタリア

ファロー諸島 21―17 ルクセンブル

オーストリア 24―28 イタリア

ノルウェー 24―17 ファロー諸島

ノルウェー 18―15 オーストリア

ルクセンブルグ 16―13 イタリア

【順伊】①ノルウェー4戦全勝②オーストリア3勝1敗③ファロー諸島1勝3敗（得失点差マイナス3）④ルクセンブルグ1勝3敗（マイナス21）⑤イタリア1勝3敗（マイナス21）。4～5位は両者の対戦成績で決定。

▽同B組

イスラエル 18―15 ベルギー

ポルトガル 28―10 イギリス

イスラエル 37―27 イギリス

ベルギー 22―20 フランス

ベルギー 24―17 イギリス

フランス 18―17 ポルトガル

フランス 48―8 イギリス

イスラエル 26―19 ポルトガル

フランス 20―18 イスラエル

ポルトガル 30―20 ベルギー

【順位】①フランス3勝1敗（得失点差41）②イスラエル3勝1敗（28）③ポルトガル2勝2敗（20）④ベルギー2勝2敗（4）⑤イギリス4敗

▽9・10位決定戦

イタリア 31（12―4、19―13）17 イギリス

▽7・8位決定戦

ベルギー 24（13―10、11―9）19 ルクセンブルグ

▽5・6位決定戦

ポルトガル 34（16―17、18―8）25 ファロー諸島

▽3・4位決定戦

オーストリア 25（11―10、14―10）20 イスラエル

▽決勝戦

ノルウェー 21（6―11、11―6、2―1、2―1）19 フランス

★海外トピックス

大詰めの欧州4大カップ

昨秋9月から行われていたヨーロッパの4大カップ（単独クラブの対抗戦）は、2月末に準決勝が行われ、ファイナリストが決まった。

▽第20回男子ヨーロッパカップ

TV・グロスバルスタット（西独） 17（8―6、9―8）17 デュクラ・プラハ（チェコ）

デュクラ・プラハ 18（10―7、8―10）17 TV・グロスバルスタット

2試合合計14―32でグロスバルスタットが決勝進出

バルル・レイキャビク（アイスランド） 21（10―7、11―11）18 アトレチコ・マドリッド（スペイン）

アトレチコ・マドリッド 24（11―8、13―13）21 バルル・レイキャビク

42―42のタイとなり、遠征ゲームで得点が多かったレイキャビクが決勝進出

▽第5回男子ヨーロッパカップ・オブ・カップス

VfL・グンメルスバッハ（西独） 21（11―8、10―8）16 ボラク・バンヤ・ルカ（ユーゴ）

ボラク・バンヤ・ルカ 20（10―10、00―8）18 VfL・グンメルスバッハ

2試合合計39―36でグンメルスバッハが決勝進出

カルピサ・アリカンテ（スペイン） 40（16―10、24―15）25 ハイム・ヨテボリ（スウェーデン）

カルピサ・アリカンテ 28（13―12、15―13）25 ハイム・ヨテボリ

▽第19回女子ヨーロッパカップ

ポリセンストックフォルム（スウェーデン） 18（9―9、9―9）18 ラドニッキ・ベルグラード（ユーゴ）

ラドニッキ・ベルグラード 22（13―7、9―8）15 ポリセンストックフォルム

インターブラチスラバ（チェコ） 18（12―8、6―9）17 ディミトフ・ソフイア（ブルガリア）

ディミトフ・ソフイア 19（6―6、13―8）14 インターブラチスラバ

▽第4回女子ヨーロッパカップ・オブ・カップス

ロコモテイブ・ザグレブ（ユーゴ） 21（9―6、12―3）9 グトムスベルリン（西独）

ロコモテイブ・ザグレブ 16（7―2、9―6）8 グトムスベルリン

イスクラパルチザンスカ（チェコ） 18（10―7、8―4）11 コンフェクティカ・ブカレスト（ルーマニア）

イスクラパルチザンスカ 13（7―7、6―6）13 コンフェクティカ・ブカレスト

中国、西ドイツへ遠征

中国男子ナショナルチームは、このほど初の西ドイツ遠征を行ない、16戦5勝11敗の成績だった。

11敗のなかには、西ドイツ、スイス、ソ連（15分ハーフ）ナショナルとの対戦も含まれているが、ヨーロッパのA級チームとは、まだ力の差があるようだ。

陸上勝田2連勝

全日本自衛隊選手権

第11回全日本自衛隊選手権は、昨秋10月27日から30日まで、東京の駒沢体育館に16チームを集め、トーナメント法式で行われた。

決勝は、陸上勝田(茨城)×海上下総（千葉）の宿敵同士の顔合せとなったが、勝田が日本リーグ2部でもまれている経験を活かし、後半一気の攻撃で快勝。2連勝4回目の優勝を飾った。

オープンの女子は三宿中央病院（東京）が不戦勝、少年の部は武山少年工科学校（神奈川）の2連勝。

▽選手権1回戦

陸上勝田（茨城） 棄権 海上八戸二航群（青森）
海上小松島（徳島） 19―7 陸上神町（山形）
陸上久里浜（神奈川） 棄権 三宿病院（東京）
海上岩国（山口） 24―14 陸上古賀（茨城）
陸上霞ケ浦（茨城） 棄権 陸上福島（福島）
陸上東千歳（北海道） 17―16 木更津補給所（千葉）
海上下総（千葉） 棄権 陸上春日井（愛知）
海上徳島（徳島） 23―9 陸上東立川（東京）

▽同準々決勝

陸上勝田 25―6 陸上久里浜
海上小松航空隊 34―5 陸上霞ケ関
海上岩国 17―16 海上徳島
海上下総 27―18 陸上東千歳

▽同準決勝

陸上勝田 25―6 海上小松島航空
海上下総 20―10 海上岩国

▽同3位決定戦

海上岩国 22―14 海上小松島航空隊

▽同決勝

陸上勝田 17（12―4、5―5）9 海上下総

各地学生秋季リーグ③

日体、男女制覇遂ぐ

昨秋の関東学生秋季リーグは9月21日から10月27日まで駒沢屋内球技場などで行われ、男子は1部が日体、2部は東海、3部は防大4部東京理科大、5部神奈川大、6部都立大の優勝となった。

また、女子は1部が日体、2部が都留文化の優勝だった。

▽男子1部

日体 22―9 国士館
日大 24―20 慶応
早稲田 25―20 筑波
法政 18―12 中央
筑波 24―17 法政
日大 21―17 国士館
早稲田 29―21 中央
日体 28―18 慶応
慶応 20―20 中央
筑波 29―22 国士館
日体 30―24 早稲田
日大 16―15 法政
日大 21―17 早稲田
国士館 20―16 中央
日体 21―16 法政
筑波 24―23 慶応
日体 27―15 中央
筑波 27―24 日大
早稲田 30―18 慶応
法政 15―14 国士館
早稲田 20―16 国士館
慶応 19―15 法政
日体 25―20 筑波
日大 25―11 中央
国士館 19―14 慶応
早稲田 22―15 法政
筑波 23―18 中央
日体 26―24 日大

【順位】①日体7戦全勝②早稲田・日大・筑波5勝2敗⑤国士館・法政2勝5敗⑦慶応1勝1分5敗⑧中央1分6敗

▽女子1部（2回戦制）

筑波 10―10 日女体
筑波 12―8 日女体
東女体 30―3 茨城大
東女体 40―4 茨城大
日体 33―11 東京学芸大
日体 30―10 東京学芸大
日体 12―6 筑波
筑波 13―8 日体
東女体 26―7 東京学芸大
東女体 29―10 東京学芸大
日女体 28―7 茨城大
日女体 21―3 茨城大
東女体 11―9 筑波
東女体 15―10 筑波
日女体 13―10 日体
日女体 13―13 日体
東京学芸大 12―7 茨城大
東京学芸大 21―9 茨城大
日体 34―5 茨城大
日体 34―2 茨城大
東女体 12―20 日女体
日女体 15―14 東女体
筑波 17―9 東京学芸大
筑波 18―11 東京学芸大
日女体 19―15 東京学芸大
日女体 21―8 東京学芸大
筑波 17―4 茨城大
筑波 21―5 茨城大
日体 19―16 東女体
日体 16―15 東女体

【順位】①日体7勝1分2敗②東女体7勝3敗③日女体6勝2分2敗④筑波6勝1分3敗⑤東京学芸大2勝8敗⑥茨城大10敗

男女ともベストセブンなどは本誌182号既報

▼入れ替え戦（1〜2部）

▽男子

①中央 20―18 ②東海
②順天堂 19―16 ①慶応

▽女子

①茨城大 7―6 ②都留文化

◆お願い 本誌への大会記録などの寄稿には感謝しておりますがビッグイベントの結果は、つとめて大会終了後、早日にお送り下さるようお願い。（編集委員会）

全国高校選抜大会各地区予選・続報

東海、四国両ブロック代表も決まる

東海地区予選

▼男子・一回戦

県岐阜商（岐阜）12（4−1、8−2）3 四日市工（三重）

愛知（愛知）18（10−4、8−12）16 静岡農（静岡）

▽同決勝

県岐阜商 17（8−6、9−10）16 愛知

（県岐阜商は3年連続3回目）

【愛知】	得	【岐商】	得
GK 宮田	0	GK 武井	0
GK 伊藤	0	GK 広瀬雅	0
FP 山田	0	FP 端田	5
FP 高田	4	FP 浅井	1
FP 酒巻	4	FP 広瀬友	0
FP 村松	1	FP 小木曽	2
FP 所	0	FP 伊藤	3
FP 岩田	0	FP 安藤	2
FP 小沢	3	FP 清水	4
FP 村瀬	0	FP 鷲尾	0
FP 竹内	4		

17（3）PT（3）16

▼女子・一回戦

市邨学園（愛知）17（11−3、6−6）9 静岡城北（静岡）

暁（三重）11（5−3、6−2）5 岐阜南（岐阜）

▼同決勝

市邨学園 10（5−2、5−7）9 暁

（市邨学園は初出場）

【暁】	得	【市邨】	得
GK 正代	0	GK 木村	0
GK 岩渕	0	GK 野口	0
FP 稲垣	3	FP 寺沢	4
FP 坂森	1	FP 稲垣	3
FP 福島	0	FP 森	1
FP 佐藤	0	FP 鷲野	2
FP 村上	0	FP 坪井	0
FP 浅井	0	FP 岩佐	0
FP 高橋	5	FP 村田	0
FP 佐久間	0	FP 今枝	0
FP 谷渕	0	FP 田原	0
FP 中村	0	FP 安田	0

10（1）PT（1）9

四国地区予選

▼男子・一回戦

幡多農（高知）15（6−7、5−4：1−1、3−2）14 高松工芸（香川）

新居浜工（愛媛）19（6−1、13−1）2 池田（徳島）

▽同決勝

新居浜工 23（12−6、11−3）9 幡多農

（新居浜工は3年連続3回目）

【幡多】	得	【新工】	得
GK 田野	0	GK 星加	0
FP 岡	0	GK 牧野	0
FP 下西	2	FP 佐伯	3
FP 中野	0	FP 村上	1
FP 遠山	0	FP 横山	1
FP 中平	2	FP 鈴木	6
FP 林	1	FP 真砂	4
FP 東	3	FP 岡部	7
FP 沖	1	FP 神野	0
FP 田辺	0	FP 石川	0
		FP 伊藤	1
		FP 高岡	0

23（3）PT（1）9

▼女子・一回戦

新居浜商（愛媛）11（7−4、4−5）9 三本松（香川）

大正（高知）17（11−2、6−4）6 池田（徳島）

▽同決勝

新居浜商 7（4−4、3−2）6 大正

（新居浜商は3年連続3回目）

【大正】	得	【新商】	得
GK 吉良	0	GK 永易	0
FP 平野	1	FP 飯尾	1
FP 小野川	1	FP 石村	2
FP 伊賀	1	FP 神山	3
FP 三谷	2	FP 高橋	0
FP 武石	0	FP 岡本	1
FP 岡本	1	FP 黒瀬	0
FP 土居	0	FP 近藤	0
		FP 柳原	0
		FP 岩崎	0
		FP 塩見	0

7（0）PT（0）6

各地の記録

▼茨城県中学新人大会（11月・石岡中）

▽男子準々決勝
鬼怒 34—0 石岡
伊奈 23—7 千代田
茎崎 20—9 出島北
麻生一 15—7 府中

▽同準決勝
鬼怒 15—9 伊奈
茎崎 11—3 麻生一

▽同決勝
茎崎 17—10 鬼怒

▽女子準々決勝
八千代一 12—5 北浦
伊奈 16—2 五霞
岩井南 21—5 鬼怒
麻生 14—5 玉造

▽同準決勝
麻生 14—5 岩井南
伊奈 11—2 八千代一

▽同決勝
麻生 9—8 伊奈

ムネカタ、8年連続優勝

▼第16回東北総合選手権大会（一月・福島市体育館）

▽男子準々決勝
福島SGク 19—17 青森ク
湧沢ク 29—19 岩手教員ク
大曲農 30—21 全仙台大
学法石川高ク 12—9 七戸ユニオン

▽同準決勝
湯沢ク 19—18 福島SGク
学法石川高ク 26—18 大曲農

▽同決勝
湯沢ク 15（8—4、7—7）11 学法石川高ク

▽女子準々決勝
ムネカタ 24—4 秋田和洋女
花巻南 10—4 野辺地
秋田和洋女A 12—6 あすなろ
岩手桐花ク 9—5 涌谷高OG

▽同準決勝
ムネカタ 13—3 花巻南
秋田和洋女A 11—8 岩手桐花ク

▽同決勝
ムネカタ 15（6—0、9—1）1 秋田和洋女A

男子は大阪学院、女子は大谷

▼大阪府私学総合体育大会（一月）

▽男子準々決勝
桃山 17—6 上宮
大阪学院 18—3 清風
北陽 25—10 関西大倉
此花 17—2 初芝

▽同準決勝
大阪学院 12—11 桃山
此花 20—14 北陽

▽同決勝
大阪学院 18（10—7、8—10）17 此花

▽女子準々決勝
城南 15—2 樟蔭東
住吉学園 11—5 梅花
四天王寺 9—3 宣真
大谷 11—4 東大阪

▽同準決勝
住吉学園 10—7 城南
大谷 8—5 四天王寺

▽同決勝
大谷 6（5—1、1—3）4 住吉学園

男子は修道高、女子は山陽女

▼第3回全国高校選抜大会中国地区予選（一月・広島県立体育館）

▽男子準決勝
飯南高 26—16 境港工高
修道高 16—12 総社高

▽同決勝
修道高 24（11—5、13—6）11 飯南高

▽女子準決勝
山陽女子高 19—2 米子南商高
総社高 4—3 松江第一高

▽同決勝
山陽女子高 19（10—2、9—2）4 総社高

男子は中大附属、女子は拓大一

▼54年度東京都高校秋季大会（十一月〜一月）

▽男子準々決勝
中大附属 26—4 早大学院
江戸川 13—11 創価
明星 20—11 神代
駒大高 25—6 三宅

▽同準決勝
中大附属 33—8 江戸川
駒大高 16—11 明星

▽同決勝
中大附属 18（7—8、11—8）16 駒大高

▽同三位決定戦
明星 26—7 江戸川

▽女子準々決勝
藤村女子 10—6 広尾
桐朋 22—1 国分寺
佼成女 13—3 篠崎
拓大一 18—5 神代

▽同準決勝
桐朋 10—9 藤村女子
拓大一 13—9 佼成女

▽同決勝
拓大一 7（5—2、2—3）5 桐朋

▽同三位決定戦
藤村女子 12—11 佼成女子

女子ムネカタ強し

▼第22回福島県室内選手権大会（一月・郡山総合体育館）

▽男子準々決勝
福島SGク 29—16 福島大
学石川OB 31—17 長沼高OB
長沼高 23—16 聖光学院
学石川高 31—29 福島教員

▽同準決勝
福島SGク 13—12 学石川OB
学石川高 16—10 長沼高

▽同決勝
福島SGク 34（21—7、13—13）20 学法石川

▽女子準々決勝
ムネカタ 22—1 緑ケ丘高
石川高OG 15—2 たちばなク
光ケ丘 14—12 石川高
長沼高 22—7 マーキュリー

▽同準決勝
ムネカタ 18—3 石川高OG
長沼高 14—6 光ケ丘

▽同決勝
ムネカタ 23（10—2、13—3）5 長沼高

名城大Aの圧勝

▼第21回愛知学生選手権大会

▽男子準々決勝
中京大C 25—11 愛大(豊)A
名城大A 15—11 中京大B
名城大B 11—9 中京大D
中京大E 16—8 愛学大A
名城大B 21—11 中京大A

▽同準決勝
名城大A 34—12 中京大C
中京大E 22—22 名城大B
3—2 ペナルティコンテスト

▽同決勝
名城大A 24（13—7、11—9）16 中京大E

▽女子準決勝
中京大B 11—4 中京大A
中京女大B 13—9 中京大C

▽同決勝
中京女大B 8（5—5、3—2）7 中京大B

男子愛知、女子は市邨

▼昭和54年度愛知県高等学校新人体育大会 兼第8回東海高校室内選手権大会・第3回全国高校選抜大会県予選会（一月・二月）

▽男子準々決勝

名南工 24―12 春日井高
一宮 20―9 名市工
中京 21―10 一宮西
愛知 18―14 桜台

▽同準決勝
名南工 15―15 一宮
3―2 PTC
愛知 17―15 中京

▽同決勝
愛知 17（10―5 7―7）12 名南工

▽女子準々決勝
市邨 16―5 西尾
佐屋 14―9 吉良
岩津 13―8 桜台
名短付 12―8 緑丘商

▽同準決勝
市邨 15―7 佐屋
名短付 8―4 岩津

▽同決勝
市邨 10（5―4 5―5）9 名短付

筑波大の圧勝

▼第6回茨城県一般室内選手権大会（一月・二月・笠松運動公園体育館）

▽準々決勝
茨城大学 22―2 自衛隊古河
日本原研 23―18 筑波会
筑波大学 32―8 阿見ク
自衛隊勝田 30―12 鉾田ク

▽準決勝
茨城大学 17―12 日本原研
筑波大学 23―22 自衛隊勝田
（第一延長3―2）

▽決勝
筑波大学 23（9―10 14―8）18 茨城大学

男女とも野辺地が優勝

▼第3回全国高校選抜大会青森県第2次予選会（一月・弘前市民体育館）

▽男子準決勝
野辺地 21―11 青森
青森商 21―11 青森東

▽同決勝
野辺地 14（9―5 5―6）11 青森東

▽女子準決勝
青森西 16―10 青中央
野辺地 12―5 七戸

▽同決勝
野辺地 9（4―4 5―1）5 青森西

男子は千葉教員が辛勝

▼第6回千葉県総合選手権大会

▽男子準々決勝
千葉教員 17―7 柏高
丸善石油 19―15 清水ク
市川高 18―13 三井石油
海上自下総 24―9 佐原ク

▽同準決勝
千葉教員 25―6 市川高
海上自下総 21―13 丸善石油

▽同決勝
千葉教員 17（6―6 6―6 0―0 1―1 1―1 3―1）15 海上自下総

▽女子準決勝
全昭和 11―4 東邦高
昭和学院 12―3 流山中央B

▽同決勝
昭和学院高 9（4―4 5―4）8 全昭和

高校男子は氷見が完勝

▼第19回富山県室内選手権大会（二月・富山市体育館）

▽高校男子準決勝
氷見 21―18 高岡商
高岡日大 15―9 富山南

▽同決勝
氷見 22（13―3 9―11）14 高岡日大

▽高校女子準決勝
有磯 12―4 高岡女
小杉 12―9 高岡日大

▽同決勝
有磯 17（9―2 8―0）2 小杉

▽一般男子準決勝
八尾ク 21―16 氷見クシニア
氷見ク 17―14 桜樹クB

▽同決勝
氷見ク 20（9―7 12―7）14 八尾ク

▽一般女子決勝
桜球会 13（6―5 7―4）9 G小杉高O

▼第2回会長杯争奪室内選手権大会（一月・長崎工業高校体育館）

▽一般準決勝
佐世保ク 34―15 佐世保北OB
口加高OB(A) 不戦勝 瓊浦高校OB

▽同決勝
佐世保ク 31（14―9 17―10）19 口加高校OB(A)

▽高校準々決勝
長工高A 14―7 口加高
長工高B 14―9 長崎南A
瓊浦高B 21―9 長工高C
日大高 16―9 長崎南B

▽同準決勝
長工高A 16―15 長工高B
瓊浦高B 20―8 日大高

▽同決勝
長工高A 18（9―4 9―5）9 瓊浦高B

▼第19回全道室内選手権大会
第3回全国高等学校ハンドボール選抜大会北海道予選大会

▽高校男子準々決勝
室蘭工業 20―14 旭川東高
函館有斗 11―8 釧路商業
札幌西高 21―7 紋別北高
釧路湖陵 21―13 函館大谷

▽同準決勝
函館有斗 24―8 室蘭工業
釧路湖陵 21―14 札幌西高

▽同決勝
釧路湖陵 11（3―2 8―4）6 函館有斗

▽高校女子準決勝
上磯高校 11―3 室蘭東高
釧路湖陵 9―8 恵庭南高

▽同決勝
上磯高校 9（6―4 3―2）6 釧路湖陵

▽一般男子準々決勝
室工大 15―11 道日体ク
北大 15―11 大谷ク
有斗ク 23―11 コルムク
教育大旭川 22―14 八雲ク

▽同準決勝
北大 16―15 室工大
有斗ク 22―10 教育大旭川

▽同決勝
有斗ク 22（14―9 8―6）15 北大

▽一般女子
教育大旭川 12（5―5 7―3）8 室商OG

宮崎県協会役員の変更

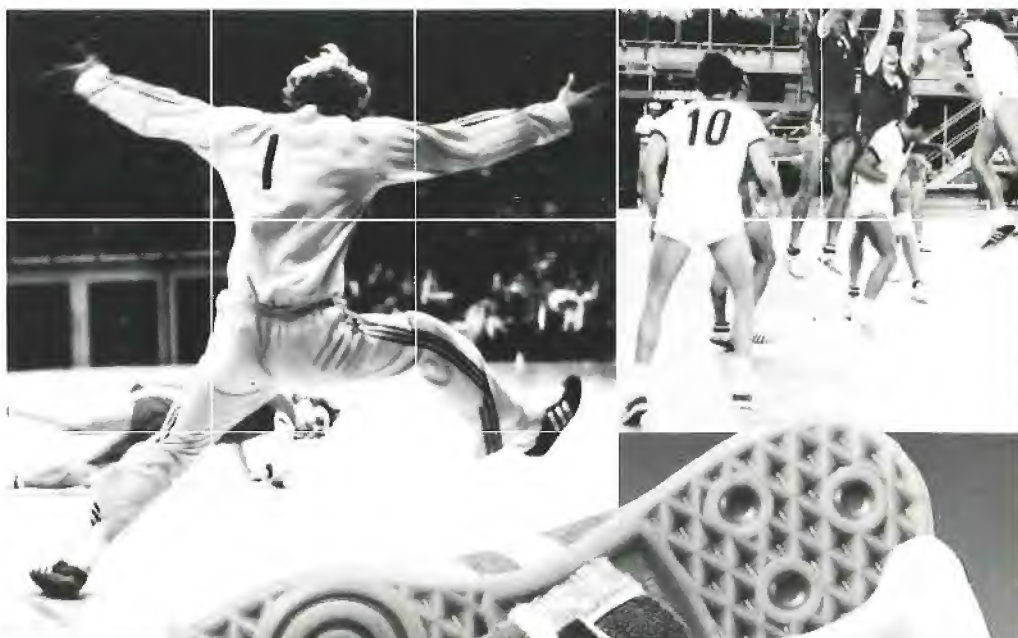
宮崎県ハンドボール協会は、昭和55年、56年度の役員改選を行った。新役員は後記の通りだが、今後の文書等の発送は新事務局長の勤務先にお願いしたい旨、連絡があった。

▽新役員
理事長 山田龍雄（都城泉ケ丘高）
副理事長 谷川幸夫（県健康増進センター）
事務局長 中村利博
〒八八〇 宮崎市天満町一三五 宮崎工業高校内

本会人事 日本協会・堤慎事務局長は、3月31日付で退会された。

各地の記録をどしどし送って下さい。
―機関誌編集委員会―

アディダスで正しいテクニックを身につけたい。



3155 Napoli
ナポリ
●ベロアレザー甲皮 ●赤×白
●シェルソール
¥8,500(標準小売価格)

3150 Athen
アテネ
●ベロアレザー甲皮 ●青×白
●シェルソール
¥8,500(標準小売価格)

デンマーク・ワールドチャンピオンシップでも、優勝ドイツチームを始め、世界16ヶ国の代表選手の78%もがアディダスハンドボールシューズでした。そのヒミツは、誰にも負けない経験と実績、そして技術開発力を背景に、世界のトップ選手のアドバイスを商品開発にダイレクトに生かしているからに他なりません。ストップ、ターン、グリップに理想的なアディダス独自のソール設計。足への文句のないサポート感。加えて、足を良く守るヒールカウンター、パッド…。大切なゲームであなたに必要なのはこのアディダス機能です。

adidas®
The science of sport.

The all-sports people


●お求めはadidas特約店で

発売元 KSG 兼松スポーツ用品株式会社 〒532 大阪市淀川区木川東2−5−3 ☎06・305−1431
〒130 東京都墨田区緑2−12−3 ☎03・634−1411

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』第一八四号
昭和四十年六月七日第三種郵便物認可 昭和五五年三月二十五日印刷 昭和五五年四月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋[illegible]神南一―一―一
電話 代表[illegible]七〇九七
振替 東京 六―五八三四八番
編集兼発行人 荒川清美
定価三百五拾円（年間購読料三千三百円）